

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（23）

国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

上野原遺跡

所在地 国分市大字川内字田吹・鍋迫ほか

1997年 11月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



縄文時代早期前葉の遺跡空中写真



P-13火山灰と土層断面



縄文時代早期前葉の土器

序 文

この概報は、国分上野原テクノパーク内の造成工事に先立って、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した上野原遺跡第4工区の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

上野原遺跡は、鹿児島湾奥部にある国分市の南部に位置し、標高が約250mのカルデラ壁の舌状台地に立地しています。遺跡は、眺望の良い景勝地であり、西の方に鹿児島湾と桜島を、北の方には霧島連峰を望むことができます。

上野原遺跡は、平成6年度の第3工区において、約7,500年前の壺形土器や土偶が発見され、文化庁主催の「新発見考古速報展'95」で全国に展示公開された縄文時代早期の遺跡として話題を集めました。

今回の調査では、縄文時代早期前葉の約9,500年前に位置付けられる集落跡が発見されました。これは、国内で最古・最大級の集落遺跡として注目されています。

平成9年6月1日から20日までと7月20日から8月31日までの一般公開では、約14万人の人々が全国から訪れ、遺跡への関心の高さが伝わった次第であります。

発掘調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成7年度から開始し、平成9年度の追加調査で終了しました。

ここに、本センターでは、第4工区の概報を作成する運びとなりました。この概報が縄文文化の研究及び文化財保護のために一役を担うことができれば幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査にご協力をいただいた鹿児島県地域振興公社並びに国分市や地元の皆様に心から感謝いたします。

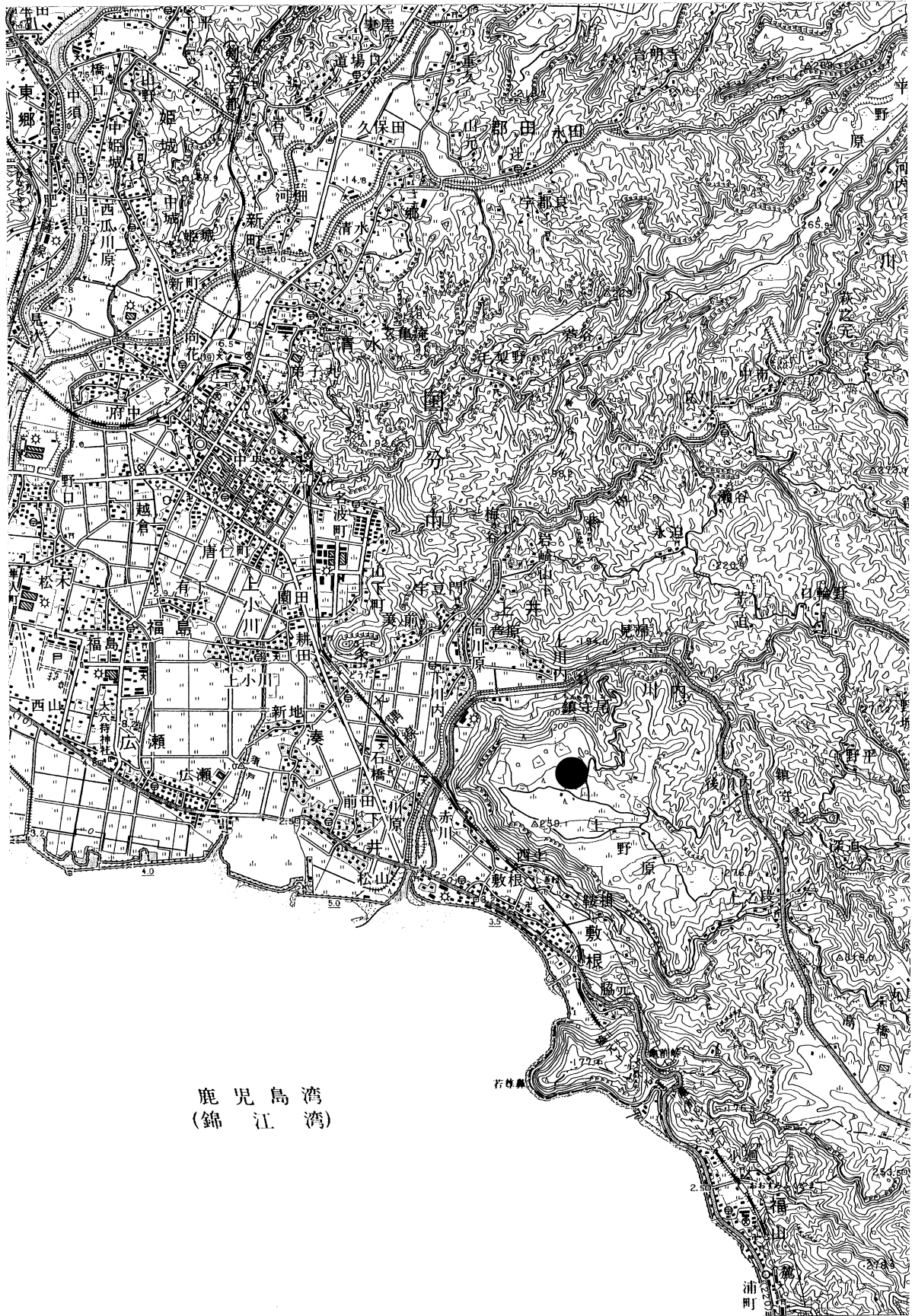
平成9年11月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 吉 元 正 幸

報告書抄録


| ふりがな | うえのはら いせき | | | | | | | |
|-----------------------------|---|--|---|--|--------------------|---------------------------|------------------------|---------------------|
| 書名 | 上野原遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 23 | | | | | | | |
| 編集者名 | 弥栄久志・森田郁朗・今村敏照・黒川忠広 | | | | | | | |
| 編集機関 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL 0995-65-8787 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1997年11月28日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| うえのはらいせき 上野原遺跡 (第4工区) | かごしまけんこくぶんし 鹿児島県国分市 おおあざかわうちあざたぶき 大字川内字田吹 なべさこ どうが お ・鍋迫・堂ヶ尾 こまさこ じゅうもんじ ・駒迫・十文字 | 462128 | 10-76 | 31度 42分 39秒 | 130度 48分 10秒 | 19950424 ～ 19970914 | 59,160 | 国分上野原テクノパーク第4工区造成工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 上野原遺跡 (第4工区) | 集落跡 | 縄文時代早期 縄文時代晩期 弥生時代中期 古墳時代前期 古代 中・近世 | 縄文早期前葉住居跡 52基 縄文早期前葉集石 39基 縄文早期前葉連穴土坑16基 縄文早期前葉土坑 約260基 縄文早期集石 104基 縄文晩期住居跡 2基 縄文晩期土坑 28基 縄文晩期掘立柱建物跡 2基 弥生中期住居跡 8基 弥生周溝状遺構 3基 円形柵状遺構 44基 柵跡 約60列 古墳住居跡 1基 | 前平式土器 吉田式土器 石坂式土器 撚糸文土器 押型文土器 黒川式土器 山ノ口式土器 中溝式土器 成川式土器 石鏃 石斧 磨石 石皿 | | | | |



鹿兒島湾
(錦江湾)

遺跡位置図 (50,000分の1)

例 言

- 1 この報告書は、国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県地域振興公社の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査における測量・実測・写真撮影は、平成7・8・9年度の調査担当者が行った。
- 4 本書掲載の測量・実測図、出土遺物の実測及び浄書は、弥栄久志・森田郁朗・今村敏照・黒川忠広が担当した。
- 5 出土遺物の写真撮影およびプリント等は、鶴田静彦・橋口勝嗣の協力を得た。
- 6 遺物番号は、本文および挿図・図版の番号と一致する。
- 7 遺構実測図に用いたスクリーントーン  は、未調査部分を表す。
- 8 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
- 9 本書の編集は、弥栄が中心になり、森田・今村・黒川が行った。

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| 序 文 | |
| 報告書抄録 | |
| 例 言 | |
| 第 I 章 調査の経過と組織 | 10 |
| 第 1 節 第 4 工区の調査に至るまでの経緯と経過 | 10 |
| 第 2 節 調査の組織 | 11 |
| 第 II 章 立地と環境 | 14 |
| 第 1 節 立地 | 14 |
| 第 2 節 周辺の遺跡 | 14 |
| 第 3 節 縄文時代早期前半の遺跡 | 18 |
| 第 III 章 遺跡の層位 | 20 |
| 第 IV 章 調査の概要 | 24 |
| 第 1 節 第 4 工区の調査概要 | 24 |
| 第 2 節 追加調査の概要 | 26 |
| 第 V 章 縄文時代早期前葉の遺構・遺物 | 31 |
| 第 1 節 遺構 | 31 |
| 1 竪穴住居跡 | 31 |
| 2 連穴土坑 | 34 |
| 3 集石遺構 | 36 |
| 4 土坑 | 38 |
| 5 道跡 | 38 |
| 第 2 節 出土遺物 | 39 |
| 1 土器 | 39 |
| (1) 遺構内出土の土器 | 39 |
| (2) 縄文時代早期前葉の土器 | 40 |
| (3) その他の縄文時代早期の土器 | 42 |
| 2 石器 | 43 |
| (1) 遺構内出土の石器 | 43 |
| (2) 縄文時代早期の遺物包含層中の石器 | 44 |
| 第 VI 章 縄文時代早期以降の遺構・遺物 | 48 |
| 第 VII 章 まとめ | 52 |
| 自然科学分析調査報告書（抜粋） | 67 |

表 目 次

| | | |
|------|------------------|----|
| 第1表 | 上野原遺跡の発掘調査経過 | 10 |
| 第2表 | 発掘調査指導委員会名簿 | 11 |
| 第3表 | 遺跡地名表 | 16 |
| 第4表 | 縄文時代早期前半の遺跡地名表 | 18 |
| 第5表 | P-13測定値一覧 | 20 |
| 第6表 | 第Ⅱエリアの調査結果概要 | 24 |
| 第7表 | 第Ⅲエリアの調査結果概要 | 24 |
| 第8表 | 第Ⅳ・Ⅴエリアの調査結果概要 | 25 |
| 第9表 | 第Ⅶエリアの調査結果概要 | 25 |
| 第10表 | 追加調査の結果概要 | 26 |
| 第11表 | 竪穴住居跡計測表 | 31 |
| 第12表 | 集石遺構計測表 | 36 |
| 第13表 | 土坑概要 | 38 |
| 第14表 | 遺構内出土の土器観察表 | 40 |
| 第15表 | 縄文時代早期前葉の土器観察表 | 40 |
| 第16表 | その他の縄文時代早期の土器観察表 | 42 |
| 第17表 | 弥生時代遺構一覧 | 48 |

挿 図 目 次

| | | |
|------|---------------------------|------|
| 第1図 | 上野原テクノパーク全体図と遺跡の位置 | 13 |
| 第2図 | 立地と周辺遺跡 | 17 |
| 第3図 | 縄文時代早期前半の遺跡地図 | 19 |
| 第4図 | 上野原遺跡第4工区の土層 | 21 |
| 第5図 | 上野原遺跡第4工区のエリアと調査範囲 | 23 |
| 第6図 | 追加調査区の地形とトレンチ配置図 | 26 |
| 第7図 | 中・近世, 古代, 弥生, 縄文晩期の遺構検出状況 | (付図) |
| 第8図 | 縄文時代早期中・後葉遺構配置図 | 27 |
| 第9図 | 縄文時代早期中・後葉遺構配置図(第Ⅱ・第Ⅲエリア) | 28 |
| 第10図 | 縄文時代早期中・後葉遺構配置図(第Ⅳエリア) | 29 |
| 第11図 | 縄文時代早期中・後葉遺構配置図(第Ⅶエリア) | 29 |
| 第12図 | 縄文時代早期前葉遺構配置図(第Ⅱエリア) | 30 |
| 第13図 | 26号竪穴住居跡 | 32 |
| 第14図 | 42・9号竪穴住居跡 | 33 |
| 第15図 | 6号連穴土坑 | 34 |
| 第16図 | 11・2号連穴土坑 | 35 |
| 第17図 | 5・6・10号集石 | 37 |
| 第18図 | 132・41・10・8・28・27号土坑 | 38 |

| | | |
|------|--------------------------------|----|
| 第19図 | 遺構内出土の土器（縄文時代早期前葉） | 39 |
| 第20図 | 縄文時代早期前葉の土器（7～9は第9層・10～16は第7層） | 41 |
| 第21図 | その他の縄文時代早期の土器 | 42 |
| 第22図 | 遺構内出土の石器（1） | 43 |
| 第23図 | 遺構内出土の石器（2） | 44 |
| 第24図 | 縄文時代早期の遺物包含層中の石器（1） | 45 |
| 第25図 | 縄文時代早期の遺物包含層中の石器（2） | 46 |
| 第26図 | 縄文時代早期の遺物包含層中の石器（3） | 47 |
| 第27図 | 縄文時代晩期の2号竪穴住居跡・6号土坑 | 49 |
| 第28図 | 弥生時代の1号竪穴住居跡・2号周溝状遺構 | 50 |
| 第29図 | 縄文時代晩期と弥生時代の土器 | 51 |
| 第30図 | 縄文時代早期前葉の遺跡範囲 | 53 |

図 版 目 次

| | | |
|------|--|----|
| 図版 1 | 縄文時代早期前葉の遺跡空中写真 | |
| 図版 2 | P-13火山灰と土層断面・縄文時代早期前葉の土器 | |
| 図版 3 | 上野原遺跡全景・土層断面・土層と遺構・遺構検出状況（縄文時代早期前葉）・第7層の集石と第10層上面の遺構検出状況 | 57 |
| 図版 4 | 周囲に柱穴が検出された竪穴住居跡（縄文時代早期前葉）・竪穴住居跡（縄文時代早期前葉）・竪穴住居跡の遺物出土状況（縄文時代早期前葉）・竪穴住居跡における連穴土坑検出状況（縄文時代早期前葉）・連穴土坑の連続（縄文時代早期前葉）・連穴土坑にP-13が堆積した状況（縄文時代早期前葉）・集石遺構（縄文時代早期前葉）・掘り込みを有する集石遺構（縄文時代早期前葉） | 58 |
| 図版 5 | 礫が入った土坑（縄文時代早期前葉）・方形土坑（縄文時代早期前葉）・第9層遺物出土状況・第9層土器出土状況・石皿出土状況・追加調査aトレンチ遺物出土状況・追加調査cトレンチ遺物出土状況・追加調査1トレンチ遺物出土状況 | 59 |
| 図版 6 | 縄文時代晩期の竪穴住居跡・縄文時代晩期の掘立柱建物跡・縄文時代晩期の土坑断面・縄文時代晩期のドングリピット・弥生時代中期の竪穴住居跡・弥生時代中期の竪穴住居跡・弥生時代の柵跡と円形柵状遺構・弥生時代の周溝状遺構 | 60 |
| 図版 7 | 縄文時代早期前葉の竪穴住居跡内の出土土器 | 61 |
| 図版 8 | 第9層（7～9）及び第7層（10～15）出土の前平式土器 | 62 |
| 図版 9 | 第7層出土の土器（17～21）と縄文時代早期前葉の竪穴住居跡内出土の石器（22～24） | 63 |
| 図版10 | 第7層出土の石器（1） | 64 |
| 図版11 | 第7層出土の石器（2） | 65 |
| 図版12 | 第7層出土の石器（3） | 66 |

第 I 章 調査の経過と組織

第 1 節 第 4 工区の調査に至るまでの経緯と経過

上野原遺跡は、昭和61年度に鹿児島県開発公社（現鹿児島県地域振興公社）の調査依頼を県教育委員会が受けて調査を実施した。

昭和61年度は、第 1 工区の第 I エリアの全面調査と第 4 工区の確認調査を実施した。その結果、第 4 工区に第 II から第 VII エリアまで約59,000㎡に及ぶ遺跡の範囲を確認した。このうち第 VI エリアは、確認調査の時点でトレンチを拡張して発掘調査を終了した。さらに平成 3 年度は、第 3 工区の確認調査を実施し、約90,000㎡に及ぶ遺跡の範囲を確認した。この第 3 工区は平成 4～6 年度に全面調査を行い、発掘調査を終了した。

平成 7 年度から 8 年度にかけて、第 4 工区の全面調査を実施した。調査は、第 VII エリアから開始し、第 II エリアで終了した。平成 9 年度は、遺跡範囲確認のための追加調査と、遺跡の一般公開を実施した。

なお、第 4 工区における発掘調査の指導には、考古学者をはじめ火山灰の研究者等幅広い領域から指導・助言を得た。

第 1 表 上野原遺跡の発掘調査経過

| 年度 | 期間 | 工区 | エリア | 調査内容 | 調査済面積㎡ | 備 考 |
|------|-----|----|---------------|--------|--------|-------------------|
| 昭和61 | 1 年 | 4 | | 確認調査 | 4,100 | 約59,000㎡の遺跡を確認 |
| | | 4 | VI | 確認全面調査 | 280 | 終 了 |
| | | 1 | I | 全面調査 | 3,600 | 終 了 |
| 平成 3 | 1 年 | 3 | | 確認調査 | 3,500 | 約90,000㎡の遺跡を確認 |
| 平成 4 | 1 年 | 3 | | 全面調査 | 30,000 | |
| 平成 5 | 1 年 | 3 | | 全面調査 | 30,000 | |
| 平成 6 | 1 年 | 3 | | 全面調査 | 30,000 | 第 3 工区終了 |
| 平成 7 | 1 年 | 4 | VII VI IV III | 全面調査 | 30,000 | |
| 平成 8 | 1 年 | 4 | IV III II | 全面調査 | 29,000 | 第 4 工区開発地終了 |
| 平成 9 | 1 年 | 4 | 残地林他 | 確認調査 | 300 | 追加調査 26,500㎡の遺跡確認 |

平成 7 年度調査指導者

| | | | |
|-------|---------------------|------|----------------------|
| 小田富士雄 | 福岡大学文学部教授（弥生） | 河口貞徳 | 鹿児島県考古学会会長（縄文・弥生） |
| 小池信彦 | 文化庁記念物課文化財調査官 | 加藤普平 | 国学院大学文学部教授（石器） |
| 広瀬和男 | 大阪府教育委員会文化課係長（弥生） | 上村俊雄 | 鹿児島大学法文学部教授（弥生） |
| 新田栄治 | 鹿児島大学教養部教授（弥生） | 小林哲夫 | 鹿児島大学理学部助教授（火山灰） |
| 渡辺芳郎 | 鹿児島大学法文学部助教授（弥生） | 本田道輝 | 鹿児島大学法文学部助手（弥生） |
| 中村直子 | 鹿児島大学埋蔵文化財調査室主任（弥生） | 大西智和 | 鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査員（弥生） |
| 片岡宏二 | 小郡市教育委員会 | | |

平成8年度調査指導者

小林達雄 国学院大学文学部教授（縄文） 岡村道雄 文化庁記念物課主任文化財調査官
 河口貞徳 鹿児島県考古学会会長（縄文） 賀川光夫 元別府大学文学部教授（縄文）
 森脇 広 鹿児島大学法文学部教授（火山灰） 小林哲夫 鹿児島大学理学部助教授（火山灰）
 本田道輝 鹿児島大学法文学部助手（縄文）

第2表 発掘調査指導委員会名簿（平成9年1月30日）

| 氏名 | 役職 | 専門分野 |
|-------|---------------|----------|
| 小田富士雄 | 福岡大学文学部教授 | 弥生・古墳～歴史 |
| 橘 昌信 | 別府大学文学部教授 | 旧石器・縄文 |
| 河口 貞徳 | 鹿児島県考古学会会長 | 縄文～古墳 |
| 上村 俊雄 | 鹿児島大学法文学部教授 | 弥生・古墳 |
| 新田 栄治 | 鹿児島大学法文学部教授 | 弥生・歴史 |
| 森脇 広 | 鹿児島大学法文学部教授 | 地理学 |
| 西田 健彦 | 文化庁記念物課文化財調査官 | |

第2節 調査の組織

平成7年度

| | | | |
|---------|----------------|--------------|-------|
| 事業主体 | 鹿児島県開発公社 | | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | | |
| 企画・調整 | 鹿児島県教育庁文化課 | | |
| 調査責任者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 所長 | 内村 正弘 |
| | " | 次長兼総務課長 | 川原 信義 |
| | " | 主任文化財主事兼調査課長 | 戸崎 勝洋 |
| 調査担当者 | " | 文化財主事 | 弥栄 久志 |
| | " | " | 西園 羊二 |
| | " | " | 寺師 孝則 |
| | " | " | 富田 逸郎 |
| | " | 文化財研究員 | 中村 和美 |
| | " | " | 有馬 孝一 |
| 調査事務担当者 | " | 主査 | 成尾 雅明 |
| | " | 主事 | 追立ひとみ |

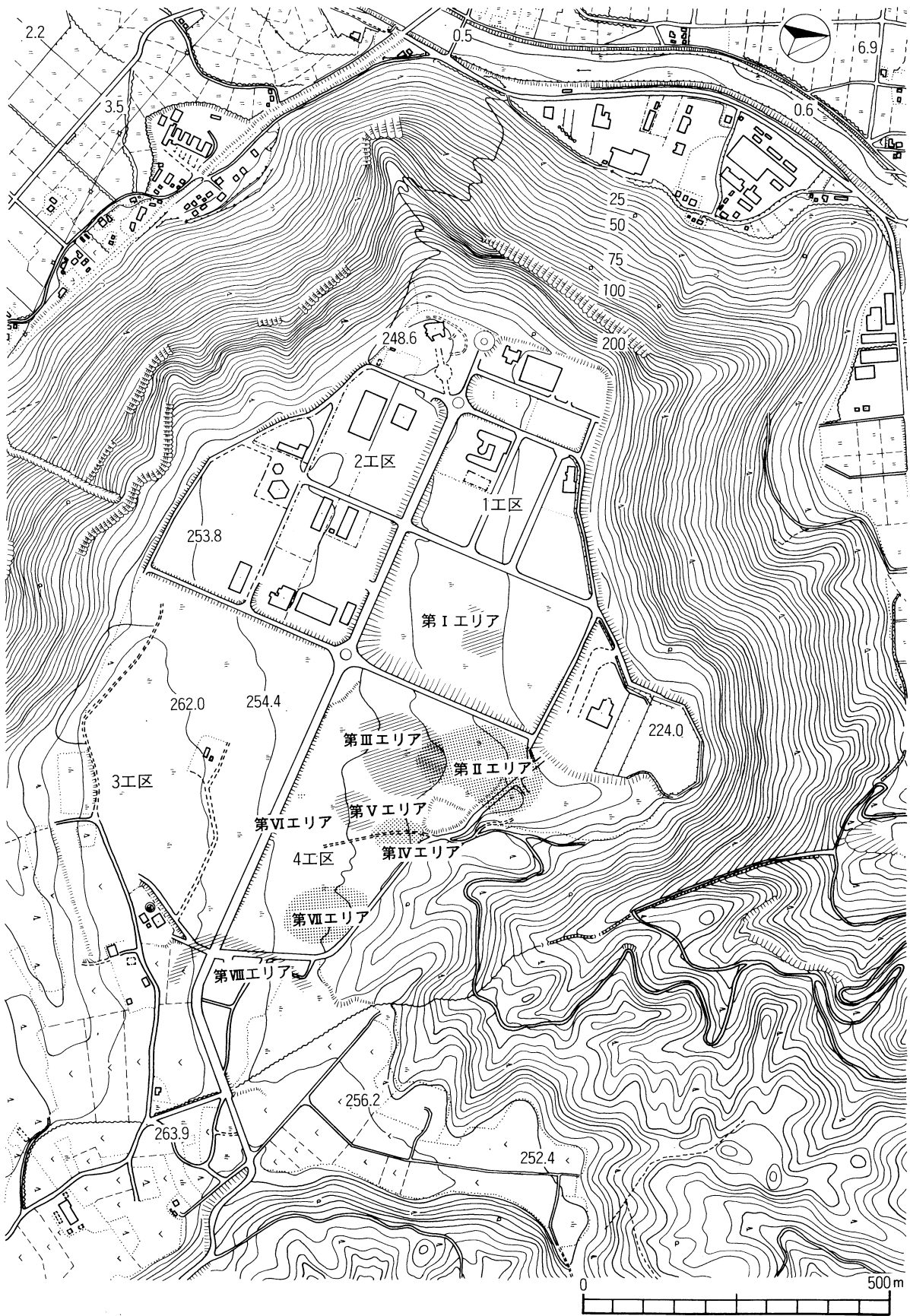
平成8年度

| | | | |
|---------|----------------|----------------|-------|
| 事業主体 | 鹿児島県地域振興公社 | | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | | |
| 企画・調整 | 鹿児島県教育庁文化財課 | | |
| 調査責任者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 所 長 | 吉元 正幸 |
| | " | 次長兼総務課長 | 尾崎 進 |
| | " | 主任文化財主事兼調査課長 | 戸崎 勝洋 |
| | " | 課長補佐兼第一調査係長 | 新東 晃一 |
| | " | 主任文化財主事兼第二調査係長 | 立神 次郎 |
| 調査担当者 | " | 文化財主事 | 弥栄 久志 |
| | " | " | 西園 羊二 |
| | " | " | 森田 郁朗 |
| | " | 文化財研究員 | 今村 敏照 |
| | " | " | 黒川 忠広 |
| 調査事務担当者 | " | 主 査 | 成尾 雅明 |
| | " | " | 前屋敷裕徳 |
| | " | 主 事 | 追立ひとみ |

追加調査の組織

平成9年度

| | | | |
|---------|----------------|--------------|-------|
| 事業主体 | 鹿児島県地域振興公社 | | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | | |
| 企画・調整 | 鹿児島県教育庁文化財課 | | |
| 調査責任者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 所 長 | 吉元 正幸 |
| | " | 次長兼総務課長 | 尾崎 進 |
| | " | 主任文化財主事兼調査課長 | 戸崎 勝洋 |
| | " | 課長補佐兼第一調査係長 | 新東 晃一 |
| 調査担当者 | " | 文化財主事 | 弥栄 久志 |
| | " | " | 森田 郁朗 |
| | " | 文化財研究員 | 今村 敏照 |
| | " | " | 黒川 忠広 |
| 調査事務担当者 | " | 主 査 | 前屋敷裕徳 |
| | " | " | 政倉 孝弘 |
| | " | 主 事 | 追立ひとみ |



第1図 上野原テクノパーク全体図と遺跡の位置

第Ⅱ章 立地と環境

第1節 立地

上野原遺跡第4工区は、国分市川内字田吹・鍋迫ほかにある。遺跡の所在する国分市は、鹿児島市から北へ約30km、鹿児島県のほぼ中央部に位置しており、北部は霧島連山をはじめとする台地や山地に囲まれ、南部は大小河川の流水作用をうけて形成された沖積平野である国分平野が広がっている。国分平野の広さは約1500haあり、鹿児島湾沿岸最大の平野である。その国分平野と桜島の間にある錦江湾奥部は、始良カルデラの名で知られ、東西約24km、南北約23kmのほぼ円形のカルデラである。

国分市の台地は、主に始良カルデラ噴出の「シラス」と呼ばれる火砕流堆積物によって形成されている。シラスは細砂粒子が多いために浸透性が大きく、乾燥時には安定するが降雨時には軟弱になり、流水作用を受けて浸食・崩壊が絶えない。このシラスが、北部から東部にかけて存在しており、これは市の約70%を占めている。

国分市は、713年（和同6年）に大隅国が置かれた地である。この地には、国府や大隅国分寺等があり、大隅国の中心地として発展してきたところで、市内には数多くの史跡・遺跡が存在する。その後、1604年（慶長9年）に島津義久が舞鶴城（現在の国分小学校・国分高等学校）に入城し、国分平野の干拓を行い、今日でもこれが国分市域の基礎となっている。

上野原遺跡は、国分市の南東、標高約250mの台地上に位置している。この台地は通称上野原台地と呼ばれている。台地の南は鹿児島湾に接しており、北と西を検校川の支流鎮守ヶ尾川が走り、深い谷を形成している。上野原台地の面積は、100haを越え、国分上野原テクノパークの建設地として、第1工区から第4工区に区画されている。

第4工区は、台地中央部を走る道路から緩やかに傾斜する北側部分にあり、いくつかの舌状台地によって構成されている。この舌状台地の周辺からは、現在湧水地点がいくつか確認されており、最も近い湧水は、第4工区の第Ⅱエリアより徒歩10分弱、標高にして約30mほど下った所にある。

第2節 周辺の遺跡

国分市は、以前より地元の研究者や鹿児島県教育委員会、国分市教育委員会などによる埋蔵文化財分布調査や発掘調査により、多数の遺跡が確認されている。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。このことは、台地上の発掘調査があまり行われていないためと考えられる。実際、国分平野の北西に位置している溝辺台地では、旧石器時代の遺跡が存在している。このことから、今後周辺の台地において、旧石器時代の遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代

まず、早期の遺跡として、平椀式土器の標識遺跡である平椀貝塚がある。平椀貝塚は、昭和46年に河口貞徳氏によって発掘調査された遺跡で、上野原遺跡の第3工区ではこの平椀式土器が多数出土している。城山山頂遺跡では、遺物包含層こそ確認されていないが、縄文時代早期の遺物が出土

している。また当遺跡では、縄文時代前期の曾畑式土器がわずかに出土している。鍛冶屋馬場遺跡では、縄文時代後期の市来式土器が出土している。なお、上野原遺跡第3工区では、この時期の陥し穴とみられる遺構が多数検出されている。晩期の遺跡には、妻山元遺跡があり、黒川式土器や突帯文土器が出土しており、晩期後半の編年を解明する良好な資料もみられる。

弥生時代

この時期の遺跡は、発掘件数が少なく、現在のところ上野原遺跡第1工区と口輪野洞穴、そして平成5年に発掘調査が行われた本御内遺跡が知られている。上野原遺跡第1工区では、中期後半から後期前半と考えられている山ノ口式土器に伴って、宮崎県で見られる後期前半とされている中溝式土器が出土している。このほか、間仕切りをもつ竪穴住居や棟持ち柱付き掘立柱建物跡などが検出されている。中でも中溝式土器と山ノ口式土器との関係は非常に注目され、今後鹿児島県と宮崎県における当該期の編年に関わる研究が求められている。本御内遺跡からは、弥生時代後期とされる住居跡・破砕鏡が検出され、中国大陸及び北部九州との交流を裏付ける資料となっている。

古墳時代

古墳時代の遺跡には、城山山頂遺跡がある。この遺跡からは43基の竪穴住居跡が検出されている。ここからは、在地の土器に混ざり畿内地方に見られる布留式土器が出土しており、古墳時代における南九州と畿内大和勢力との関わりを知る上で極めて重要な遺跡である。

歴史時代

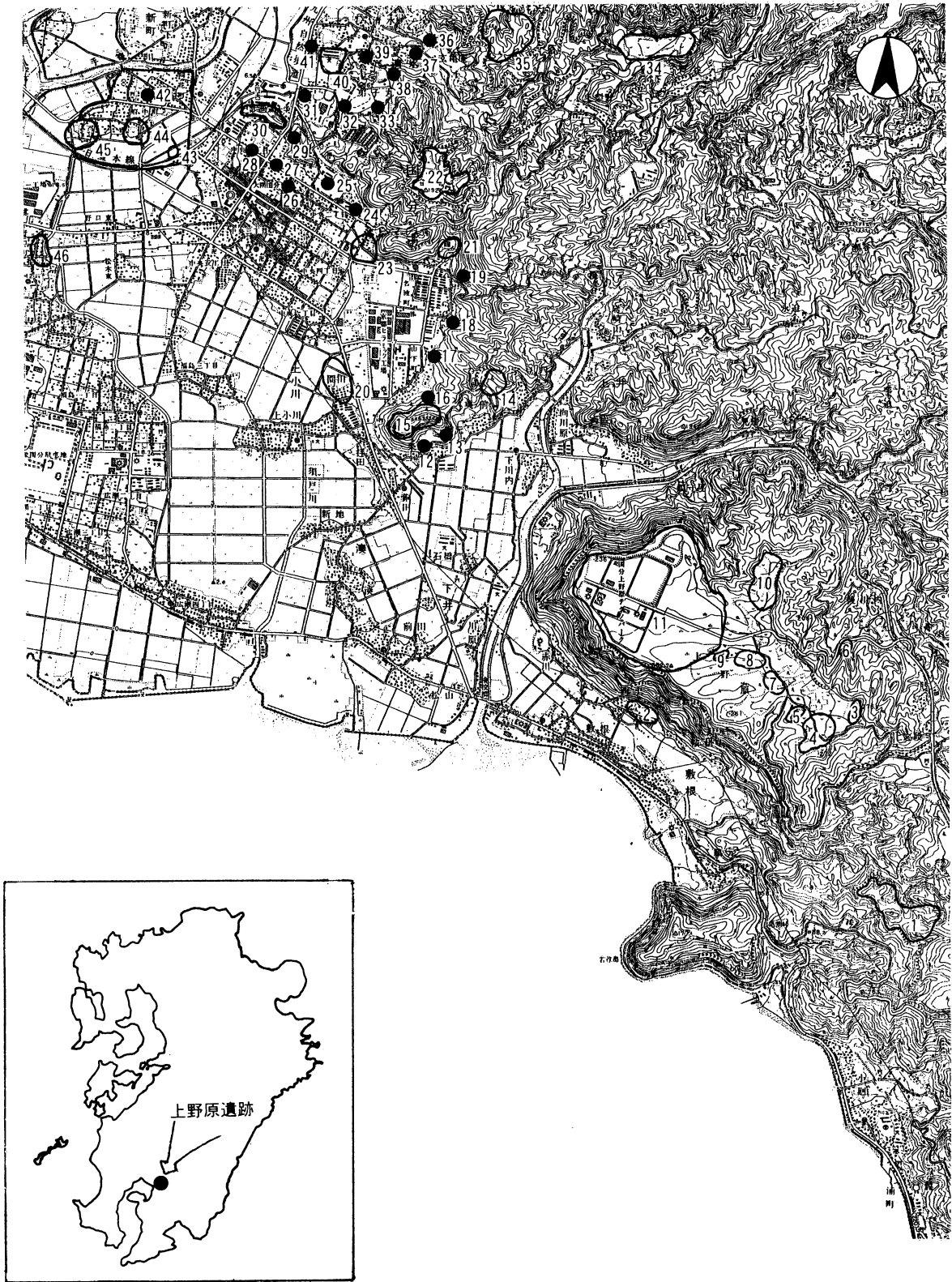
奈良・平安時代になると、国分市は大隅国の中心地として、国府・国分寺等が設置されている場所である。鍛冶屋馬場遺跡では、多量の布目瓦片や土師器・須恵器が出土している。また、大隅国分寺のものと考えられる溝状遺構も確認されており、大隅国分寺の寺域を判断する上で、貴重な遺跡となっている。その一方で、大隅国府跡は明確な位置が判明しておらず、現在国府府中説と真孝説の2論があるが、最終的には発掘調査による結果待ちという状況である。

〈参考文献〉

- 中村耕治 「鹿児島県国分市上野原遺跡」『日本考古学年報』46 1995
- 河口貞徳 「平梶貝塚」『鹿児島考古』26号 1992
- 新東晃一 「原始・古代の国分」『国分郷土市』上巻 1997
- 国分市教育委員会 「妻山元遺跡」『国分市埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1985
- 国分市教育委員会 「鍛冶屋馬場・亀ノ甲遺跡」『国分市埋蔵文化財発掘調査報告書』 1989
- 新田栄治 「鹿児島湾北部における考古学一般的調査報告1」『鹿児島大学教養部史学科報告』第29号 1980
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 「本御内遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(14) 1995

第3表 遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 備考 |
|----|--------|-----------|---------|---------------|
| 1 | 敷根城跡 | 敷根 | 中世 | |
| 2 | 大王坂 | 敷根大王坂 | 古・歴 | 土師器・青磁器 |
| 3 | 矢祢前 | 下井矢祢前 | 縄 | |
| 4 | 藤ヶ迫 | 藤ヶ迫 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 5 | 後川内 | 後川内 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 6 | 東原 | 東原 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 7 | 中原 | 中原 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 8 | 水ヶ迫 | 水ヶ迫 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 9 | 堂ヶ尾 | 堂ヶ尾 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 10 | 鍋迫 | 鍋迫 | 縄・古 | |
| 11 | 上野原 | 川内字田吹ほか | 縄・弥・古・歴 | 本概報 |
| 12 | 平楯貝塚 | 上井201 | 縄 | 昭和46年河口貞徳氏調査 |
| 13 | 中囲貝塚 | 上井一条 | 縄 | 押型文・石器・人骨 |
| 14 | 桶脇 | 桶脇 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 15 | 上井城跡 | 上井一条 | 中世 | 上井氏居城 |
| 16 | 山下A | 山下町鎮守 | 弥・古 | 昭和55年新田栄治氏調査 |
| 17 | 山下B | 山下町鎮守 | 古 | " |
| 18 | 名波A | 名波町小波谷 | 弥・古 | " |
| 19 | 名波B | 名波町小平原 | 縄・古 | " |
| 20 | 園田 | 上小川園田 | 弥 | 土器 |
| 21 | 大平 | 上小川大平 | 弥 | 土器 |
| 22 | 城山山頂 | 上小川新城 | 縄・古 | 昭和52・53年国分市調査 |
| 23 | 妻山元 | 中央二丁目2819 | 縄・古 | 昭和59年国分市調査 |
| 24 | 本御内 | 中央二丁目8-1 | 弥・古 | 土器・水田・住居跡・破碎鏡 |
| 25 | 舞鶴城跡 | 中央二丁目5-1 | 近世 | 島津義久居城 |
| 26 | 大隅国分寺跡 | 中央一丁目237 | 歴 | 瓦・層塔 |
| 27 | 鍛冶屋馬場 | 中央一丁目3590 | 縄・歴 | 昭和62年国分市調査 |
| 28 | 国府(小路) | 中央一丁目1930 | 歴 | 昭和63年国分市調査 |
| 29 | 坂下 | 中央一丁目坂下 | 歴 | 瓦窯跡 |
| 30 | 鼻連山城跡 | 中央一丁目10 | 中世 | |
| 31 | 清水A | 清水堤田 | 縄・弥・古 | 昭和55年新田栄治氏調査 |
| 32 | 清水B | 清水トチメ田 | | " |
| 33 | 清水C | 清水九万田 | 弥・古 | " |
| 34 | 白蔵原 | 白蔵原 | 古 | 土師器・成川式土器 |
| 35 | 清水城跡 | 中央外城 | 中世 | 山城 |
| 36 | 玄亀庵 | 清水玄亀庵 | 弥・古 | |
| 37 | 弟子丸A | 清水平等寺 | 弥・古 | 昭和55年新田栄治氏調査 |
| 38 | 弟子丸B | 清水溜池 | 弥・古 | " |
| 39 | 弟子丸C | 清水寺馬場 | 弥・古 | " |
| 40 | 智尾岡 | 弟子丸乳尾 | 弥 | 土器 |
| 41 | 弟子丸D | 清水畑井田 | 弥・古 | 昭和55年新田栄治氏調査 |
| 42 | 亀甲土坑 | 府中亀甲亀里 | 古 | 昭和29年寺師見國氏調査 |
| 43 | 大隅国府跡 | 府中亀甲亀里 | 歴 | 瓦 |
| 44 | 岡見山 | 府中塚脇 | 弥・歴 | 昭和59年国分市調査 |
| 45 | 気色の社 | 府中天神坊 | 弥 | 土器・石斧 |
| 46 | 弥勒寺 | 野口弥勒寺 | 古 | 成川式土器 |



第2図 立地と周辺遺跡

第3節 縄文時代早期前半の遺跡

今回発掘された土器は、主に南九州貝殻文系土器と呼ばれている。この地名表は、その中でも当遺跡の主体となる前平式土器に関して、報告書が刊行されている遺跡あるいは資料化されている遺跡について作成した。

第4表 縄文時代早期前半の遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 番号 | 遺跡名 | 所在地 |
|----|---------|-------------|----|----------|---------------|
| 1 | 後陣遺跡 | 日向市日知屋 | 36 | 霧島ヶ丘遺跡 | 鹿屋市霧島ヶ丘公園 |
| 2 | 橋山第1遺跡 | 高岡町花見字橋山 | 37 | 打馬平原遺跡 | 鹿屋市打馬平原 |
| 3 | 伊屋ヶ谷遺跡 | 宮崎市上北方字伊屋ヶ谷 | 38 | 岡泉遺跡 | 鹿屋市野里町西原台 |
| 4 | 小原山第1遺跡 | 宮崎市瓜生野字小原山 | 39 | 地蔵免遺跡 | 末吉町二之方地蔵免 |
| 5 | 跡江貝塚 | 宮崎市跡江字無田ノ上 | 40 | 丸山遺跡 | 都城市関之尾町丸山5988 |
| 6 | 橋上遺跡 | 高岡町内山2887番地 | 41 | 上野原遺跡 | 国分市川内田吹ほか |
| 7 | 天ヶ谷遺跡 | 野尻町東麓字天ヶ谷 | 42 | 平楯貝塚 | 国分市上井平楯 |
| 8 | 砂田遺跡 | 田野町八重字砂田 | 43 | 城山山頂遺跡 | 国分市上小川新城 |
| 9 | 前畑第1遺跡 | 田野町八重字佐野前田 | 44 | 桑ノ丸遺跡 | 溝辺町崎森桑之丸 |
| 10 | 札ノ元遺跡 | 田野町 | 45 | 高峠遺跡 | 加治木町小山田字高峠 |
| 11 | 芳ヶ迫第1遺跡 | 田野町字芳ヶ迫 | 46 | 木屋原遺跡 | 溝辺町麓木屋原 |
| 12 | 二ツ山第1遺跡 | 田野町 | 47 | 山崎B遺跡 | 栗野町木場牛瀬戸 |
| 13 | 田上遺跡 | 清武町木原 | 48 | 木場A遺跡 | 栗野町木場外堀 |
| 14 | 小山尻東遺跡 | 清武町木原 | 49 | 今園遺跡 | 吉松町 |
| 15 | 辻遺跡 | 清武町木原字辻 | 50 | 妙見遺跡 | えびの市東川北字妙見 |
| 16 | 若宮田遺跡 | 清武町 | 51 | 大丸・藤ノ迫遺跡 | 山江村山田字藤ノ迫 |
| 17 | 前原北遺跡 | 宮崎市熊野 | 52 | 松尾山遺跡 | 大口市青木字松尾山 |
| 18 | 西ノ原第2遺跡 | 宮崎市熊野字西ノ原 | 53 | 鍋ヶ城跡 | 市来町湊町 |
| 19 | 前原西遺跡 | 宮崎市熊野 | 54 | 加栗山遺跡 | 鹿児島市川上町字加栗山 |
| 20 | 熊野原遺跡 | 宮崎市熊野 | 55 | 横井竹ノ山遺跡 | 鹿児島市犬迫町横井字地ノ眼 |
| 21 | 大平遺跡 | 串間市 | 56 | 前平遺跡 | 鹿児島市吉野町雀ヶ宮前平 |
| 22 | 開尾遺跡 | 串間市奈留字開尾 | 57 | 南州神社遺跡 | 鹿児島市上竜尾町南州神社 |
| 23 | 留ヶ字戸遺跡 | 串間市奈留字留ヶ字戸 | 58 | 清水城跡 | 鹿児島市稲荷町36-29 |
| 24 | 井手平遺跡 | 志布志町内之倉井手平 | 59 | 塚ノ越遺跡 | 吹上町入来字塚ノ越 |
| 25 | 倉園B遺跡 | 志布志町内之倉倉園 | 60 | 小堀遺跡 | 吹上町入来字小堀 |
| 26 | 田吹野B遺跡 | 志布志町田之浦吹野 | 61 | 小中原遺跡 | 金峰町宮崎字小中原 |
| 27 | 安久中原遺跡 | 都城市安久町字中原 | 62 | 河内原遺跡 | 金峰町浦之名字河内原 |
| 28 | 掛尾遺跡 | 末吉町南之郷屋敷寺 | 63 | 村原遺跡 | 加世田市村原 |
| 29 | 下牧遺跡 | 志布志町帖下牧 | 64 | 宇治野原遺跡 | 金峰町白川字宇治野原 |
| 30 | 蓑輪遺跡 | 志布志町内之倉蓑輪 | 65 | 知覧城跡 | 知覧町永里 |
| 31 | 柳遺跡 | 志布志町 | 66 | 永野遺跡 | 知覧町永里 |
| 32 | 香ノ田遺跡 | 松山町新橋香ノ田 | 67 | 北川遺跡 | 指宿市岩本北川 |
| 33 | 山ノ田遺跡 | 松山町新橋山ノ田 | 68 | 登立遺跡 | 知覧町塩屋登立 |
| 34 | 宮田遺跡 | 大隅町月の岩元字宮田 | 69 | 駒取野遺跡 | 南種子町西之駒取野 |
| 35 | 後田山下遺跡 | 高山町 | | | |



第3図 縄文時代早期前半の遺跡地図

第Ⅲ章 遺跡の層位

| | | |
|-----|-------|--|
| 1 | 第1層 | 耕作土 大正（P-3）の火山灰を含む層である。 |
| 2 | 第2層 | 黒色土 植物等が腐蝕した層である。 |
| 3 | 第3層 | 黒茶褐色土 弥生・古墳時代の遺物包含層である。 |
| 4 | 第4層 | 薄えび茶褐色土 （P-5）の火山灰を基盤にした層で、縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。 |
| 5 a | 第5 a層 | えび茶褐色土 （P-7）とアカホヤ火山灰が混ざった層である。 |
| 5 b | 第5 b層 | 明橙色土 アカホヤ火山灰 鬼界カルデラ起源で約6,300年前の火山灰である。 |
| 6 | 第6層 | 灰茶褐色土 縄文時代早期後葉の遺物包含層である。 |
| 7 | 第7層 | 黒褐色土 （P-11）を含み、植物等が腐蝕した層で、縄文時代早期前葉から後葉の遺物包含層である。 |
| 8 | 第8層 | 白色・橙色軽石混じり黒色土 約9,500年前の火山灰（P-13）を含んでいる。 |
| 9 | 第9層 | 暗茶褐色土 縄文時代早期前葉の遺物包含層で、谷部にのみ明瞭な堆積がみられる。 |
| 10 | 第10層 | 黄色土 サツマ火山灰（P-14） 約11,500年前の火山灰である。 |
| 11 | 第11層 | 暗茶褐色粘質土 腐植土層で、いわゆるチョコ層である。 |
| 12 | 第12層 | 茶褐色土 粘質を帯びた層である。 |
| 13 | 第13層 | 暗茶褐色土 粘質を帯びた層である。 |
| 14 | 第14層 | 黄褐色土と赤い粒子の混ざった火山灰土（P-15）を含んでいる。 |
| 15 | 第15層 | 暗灰褐色土 硬質の層である。若干植物等が腐蝕した層である。 |
| 16 | 第16層 | 暗灰色土 硬質の層の中に赤い粒子の混ざった火山灰（P-16）を含んでいる。 |
| 17 | 第17層 | 火山灰砂質土 桜島の最初の噴火（P-17）を含んでいる。 |

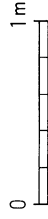
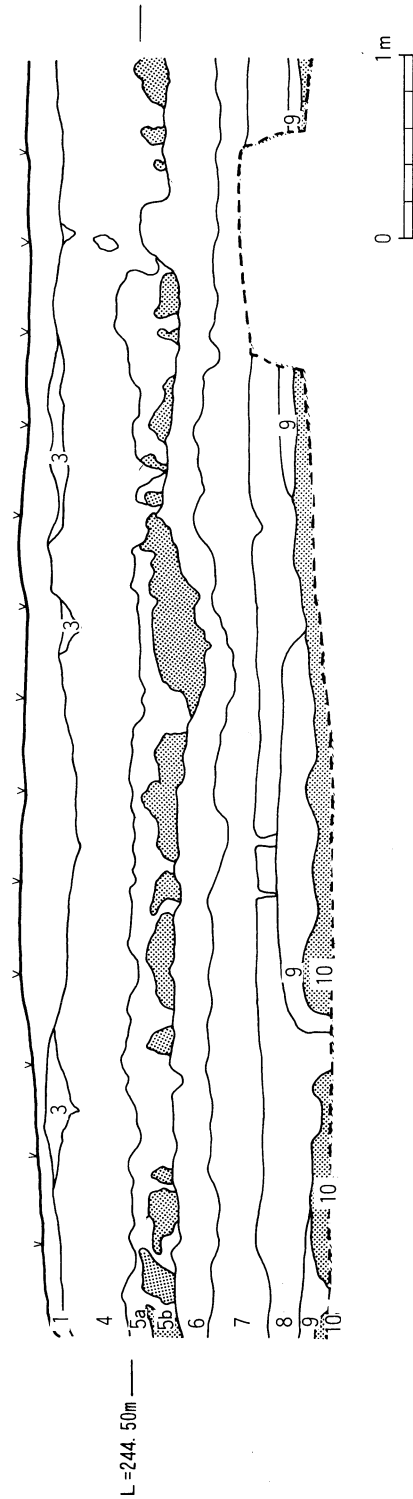
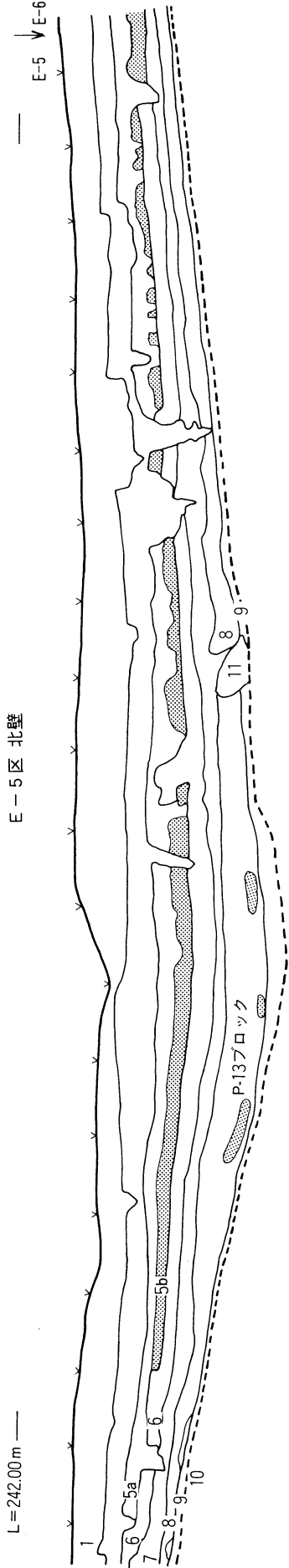
P-13について

桜島起源の火山灰は、大正の大噴火まで17枚の降下軽石が確認されている。このうちP-13は、南九州の後期更新世末・完新世の重要な鍵テフラであるP-14の次の大噴火で、東北東及び南東への2つの分布軸を持っている。上野原遺跡はこのテフラ分布の北限付近に位置する。

第5表 P-13測定値一覧

| 測定値 | 層位 | 試料 | 測定番号 (NUTA) |
|------------------|----------|----|-------------|
| 7,770±70 Y. B. P | Sz-Tk3直上 | 土壌 | 4080 |
| 8,040±80 Y. B. P | Sz-Tk3直上 | 土壌 | 3940 |
| 9,240±80 Y. B. P | Sz-Tk3直下 | 土壌 | 3875 |
| 9,340±90 Y. B. P | Sz-Tk3直下 | 土壌 | 4036 |
| 9,400±10 Y. B. P | Sz-Tk3直下 | 土壌 | 4235 |
| 9,540±90 Y. B. P | Sz-Tk3直下 | 木炭 | 4035 |
| 9,890±80 Y. B. P | Sz-Tk3直下 | 土壌 | 3756 |

奥野 充「桜島テフラ群の放射性炭素 (¹⁴C) 年代学」『月刊地球-南九州の火山噴火と遺跡の年代』214号1997



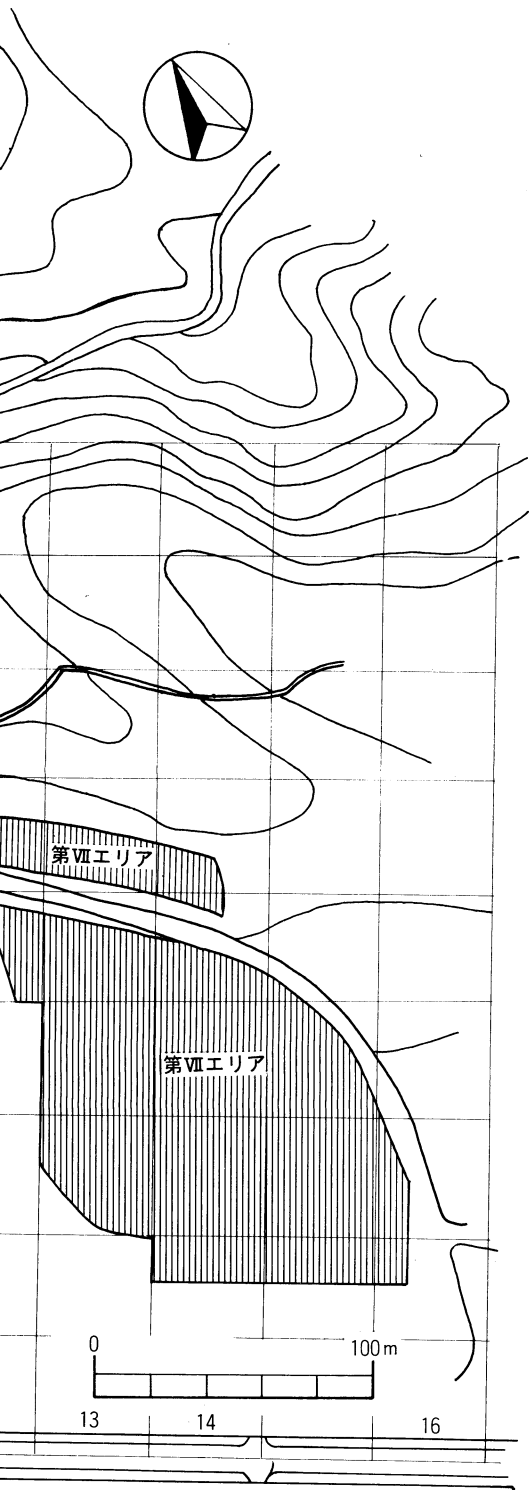
層位の説明

- 1層 耕作土
- 2層 黒色土
- 3層 黒茶褐色土(弥生・古墳時代包含層)
- 4層 薄えび茶褐色土(縄文時代後期・晩期包含層)
- 5a層 えび茶褐色土
- 5b層 明褐色土(アカホヤ火山灰)
- 6層 灰茶褐色土(縄文時代早期後葉包含層)
- 7層 黒褐色土(縄文時代早期前葉~後葉包含層)
- 8層 白色・橙色軽石混じり黒色土(P-13火山灰)
- 9層 暗茶褐色土(縄文時代早期前葉包含層)
- 10層 黄色土(サツマ火山灰)
- 11層 暗茶褐色粘質土

第4図 上野原遺跡第4工区の土層



第5図 上野原遺跡第4工区のエリアと調査範



図

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 第4工区の調査概要

1 第Ⅱエリア（第7・8・9・12図）

第Ⅱエリアは、第4工区の北部に位置し、小字は田吹である。グリッドでは、A-4・5・6区とE-5・F-6・7区間の地域である。

この地域では多期の遺構・遺物が重なって検出された。

第6表 第Ⅱエリアの調査結果概要

| 層 | 時代 | 遺構 | 出土遺物 |
|---|---------------|-----------------------------------|--|
| 1 | 中・近世 | 古道・溝 | 土師器・陶磁器 |
| 2 | 弥生中・後期 | 竪穴住居跡6基 | 山ノ口式土器・中溝式土器 |
| 3 | 縄文晩期 | 掘立柱建物跡1基 土坑5基 ドングリピット4基 | 黒川式土器・石皿・磨石・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石錐 |
| 4 | 縄文後期 | | 市来式土器 |
| 5 | 縄文前期 | | 轟式系土器・曾畑式土器 |
| 6 | 縄文早期後葉 | | 塞ノ神式土器・平楯式土器 |
| 7 | 縄文早期 前葉～後葉 | 集石56基 土坑3基 | 塞ノ神式土器・平楯式土器・桑ノ丸タイプ・押型文土器・撚糸文土器・石坂式土器・吉田式土器・前平式土器・石皿・磨石・石鏃・磨製石斧・異形石器 |
| 8 | | | |
| 9 | 縄文早期前葉 | 竪穴住居跡52基 集石39基 連穴土坑16基 土坑約260基 | 前平式土器・石皿・磨石・石鏃・磨製石斧 |

2 第Ⅲエリア（第7・8・9図）

第Ⅲエリアは、第4工区の西部に位置し、小字は田吹である。グリッドでは、I～F-5区とI～F-8区間の地域である。

この地域は、縄文・弥生・古墳時代の遺跡であった。

第7表 第Ⅲエリアの調査結果概要

| 層 | 時代 | 遺構 | 出土遺物 |
|---|--------------|--------------------------------------|---------------|
| 1 | | | |
| 2 | 古墳前期 弥生中期 | 竪穴住居跡1基 棟持柱付掘立柱建物跡1基、円形柵状遺構44基、柵跡 | 成川式土器 |
| 3 | 縄文晩期 | 掘立柱建物跡1基、土坑16基、ドングリピット7基 | 黒川式土器・打製石斧・石皿 |
| 4 | | | |
| 5 | | | |
| 6 | | | |
| 7 | 縄文早期 | 集石18基 | 平楯式土器・環状石斧 |

3 第Ⅳ・Ⅴエリア（第7・8・10図）

第Ⅳ・Ⅴエリアは、第4工区の中央部に位置し、小字は駒迫である。グリッドでは、I～E-9区とI～F-11区の間にはさまれた地域である。

この地域は縄文・弥生時代の遺跡であった。

第8表 第Ⅳ・Ⅴエリアの調査結果概要

| 層 | 時代 | 遺構 | 出土遺物 |
|---|----------|--------------------------|-------------------------------------|
| 1 | | | |
| 2 | 弥生中期 | 柵跡, 周溝状遺構2基 環状柵付掘立柱建物跡1基 | 山ノ口式土器 |
| 3 | 縄文晩期 | 竪穴住居跡2基, 土坑7基 | 黒川式土器・打製石斧・石皿 |
| 4 | 縄文後期 | | 市来式土器・指宿式土器 |
| 5 | | | |
| 6 | 縄文早期後葉 | 集石3基 | 塞ノ神式土器 |
| 7 | 縄文早期中・後葉 | 集石22基 | 押型文土器・撚糸文土器・桑ノ丸タイプ 石坂式土器・石皿・異形石器 |

4 第Ⅶエリア（第7・8・11図）

第Ⅶエリアは、第4工区の南東部に位置し、小字は駒迫である。グリッドでは、I～F-12区とH～I-16区の間にはさまれた地域である。

この地域は縄文・弥生時代の遺跡であった。

第9表 第Ⅶエリアの調査結果概要

| 層 | 時代 | 遺構 | 出土遺物 |
|---|--------|------------------|--------------|
| 1 | | | |
| 2 | 弥生中期 | 竪穴住居跡2基, 周溝状遺構1基 | 山ノ口式土器・中溝式土器 |
| 3 | 縄文晩期 | | 黒川式土器 |
| 4 | | | |
| 5 | | | |
| 6 | | | |
| 7 | 縄文早期後葉 | 集石8基 | 平楯式土器・塞ノ神式土器 |

5 小 結

第4工区を概観すると、縄文時代早期前葉は第Ⅱエリアに、早期中葉は第Ⅱエリアと第Ⅳエリアに、早期後葉は第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅶエリアに分布している。縄文時代前期は第Ⅱエリアに、後期は第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴエリアに遺物が少量ずつ分布し、縄文時代晩期と弥生時代中期は、全域に分布していることが確認された。なお、古墳時代は第Ⅲエリアにのみ分布していた。

第2節 追加調査の概要 (第6図)

平成9年度に第4工区の残地林の部分と、工業団地隣接の国分市所有地の確認調査を実施した。その結果、北側に延びた舌状台地にも縄文早期前葉の遺跡が続いていることを確認した。

1 残地林地帯の調査

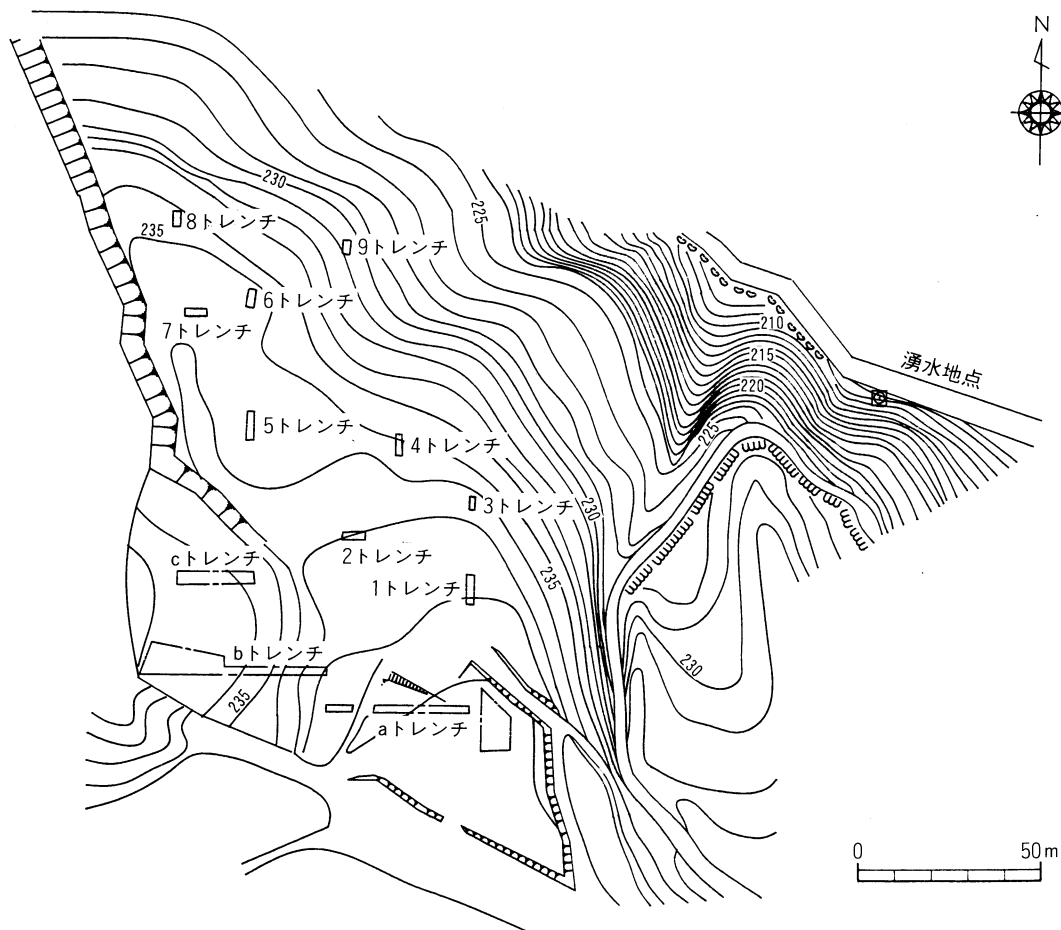
3本のトレンチ約200㎡の面積で確認調査を実施した。a・cトレンチで第7・9層に縄文時代早期の遺物を確認した。

2 国分市所有地の調査

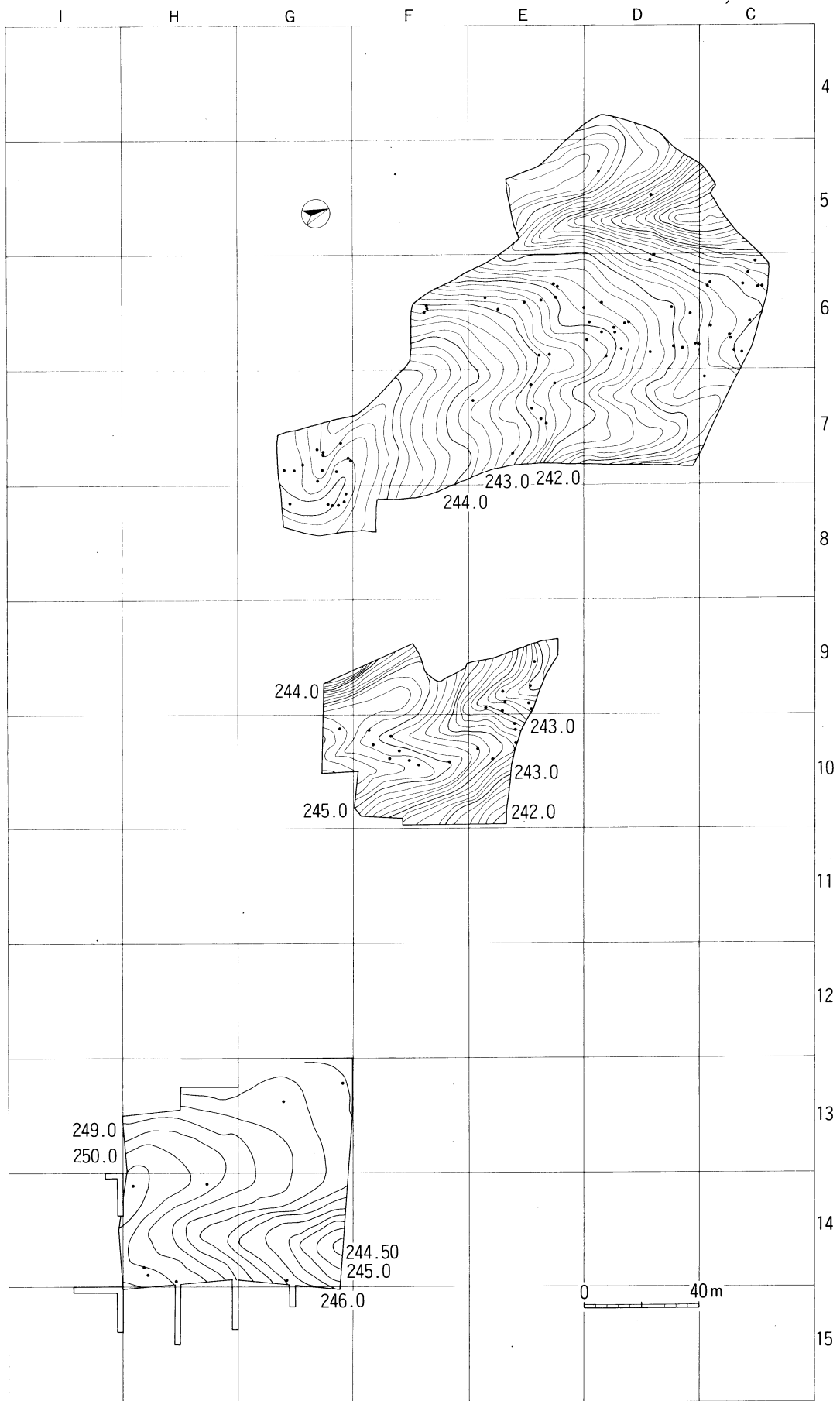
トレンチは9本設定し、約100㎡の面積を掘り下げた結果、第6・9トレンチ以外では、縄文時代早期の遺物が確認された。

第10表 追加調査の結果概要

| トレンチ番号 | 出土層 | 出土遺物 | トレンチ番号 | 出土層 | 出土遺物 |
|--------|------------|--------------------------|--------|--------|--------------------|
| 1 | 9, 7 | 前平式土器・吉田式土器・礫器, 前平式土器・磨石 | 2 | 9, 6 | 黒曜石, 塞ノ神式土器 |
| 3 | 7, 6 | 前平式土器, 塞ノ神式土器 | 4 | 7・6, 3 | 吉田式土器, 黒川式土器・石鏃・敲石 |
| 5 | 9, 7, 6, 4 | 礫, 前平式土器, 吉田式土器, 黒川式土器 | 6 | 3 | 黒川式土器 |
| 7 | 9, 7, 6, 4 | 磨石, 形式不明土器, 磨石, 黒川式土器 | 8 | 7, 3 | 礫・石器, 黒川式土器 |
| 9 | | 出土遺物無し | | | |



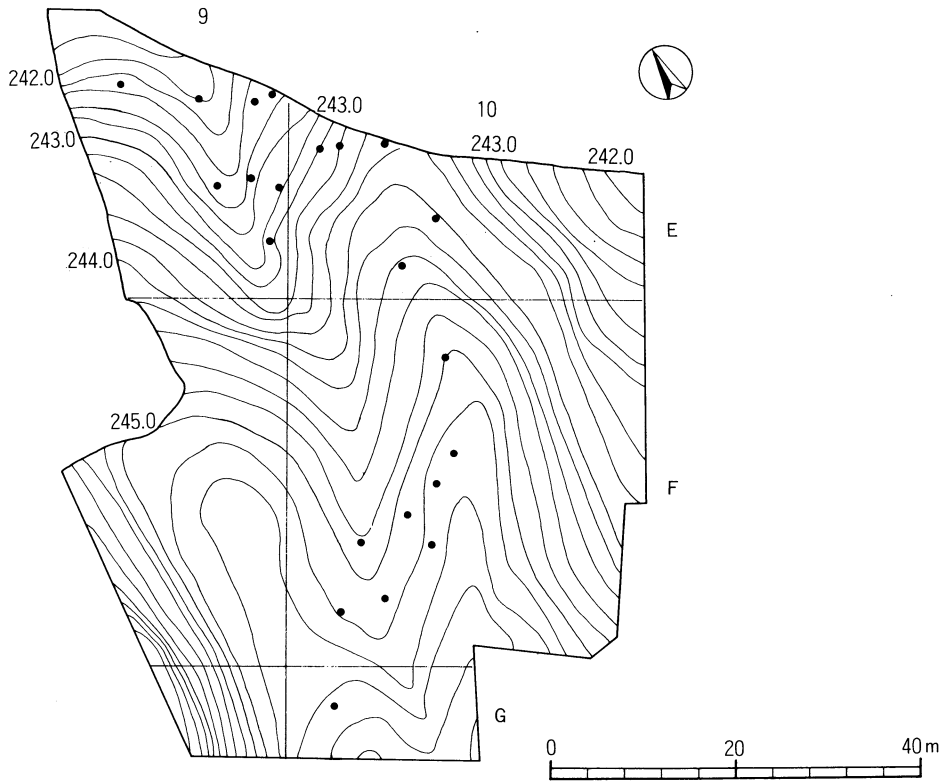
第6図 追加調査区の地形とトレンチ配置図



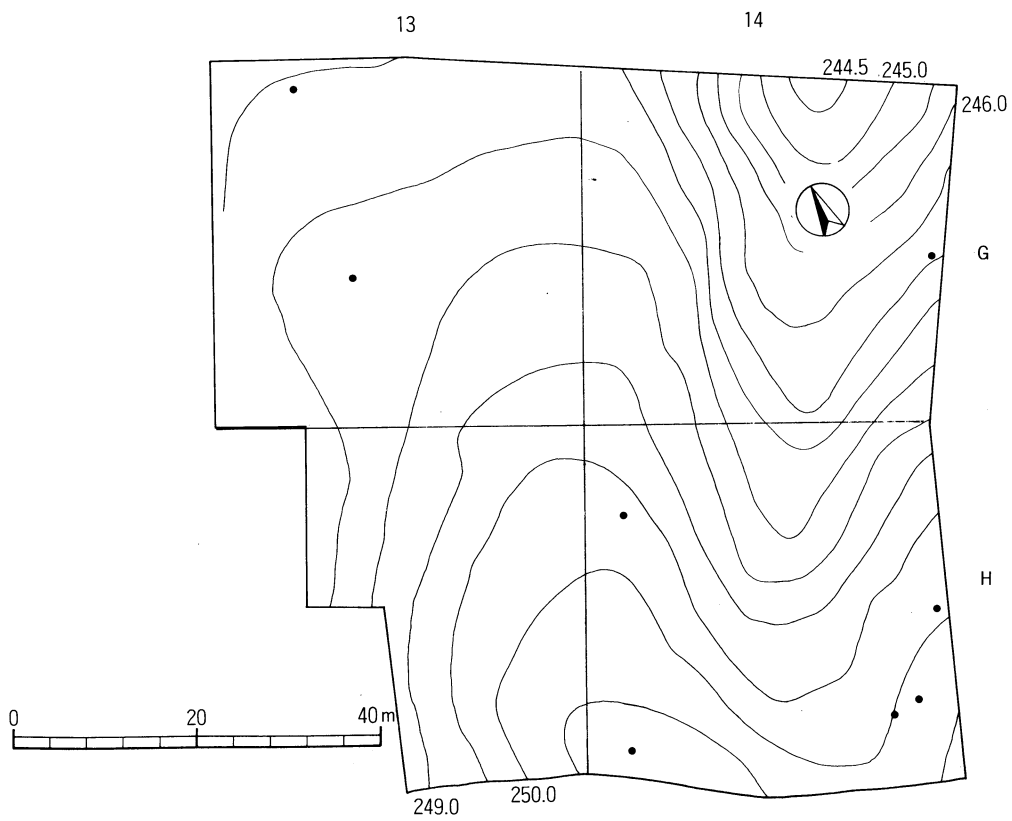
第8図 縄文時代早期中・後葉遺構配置図



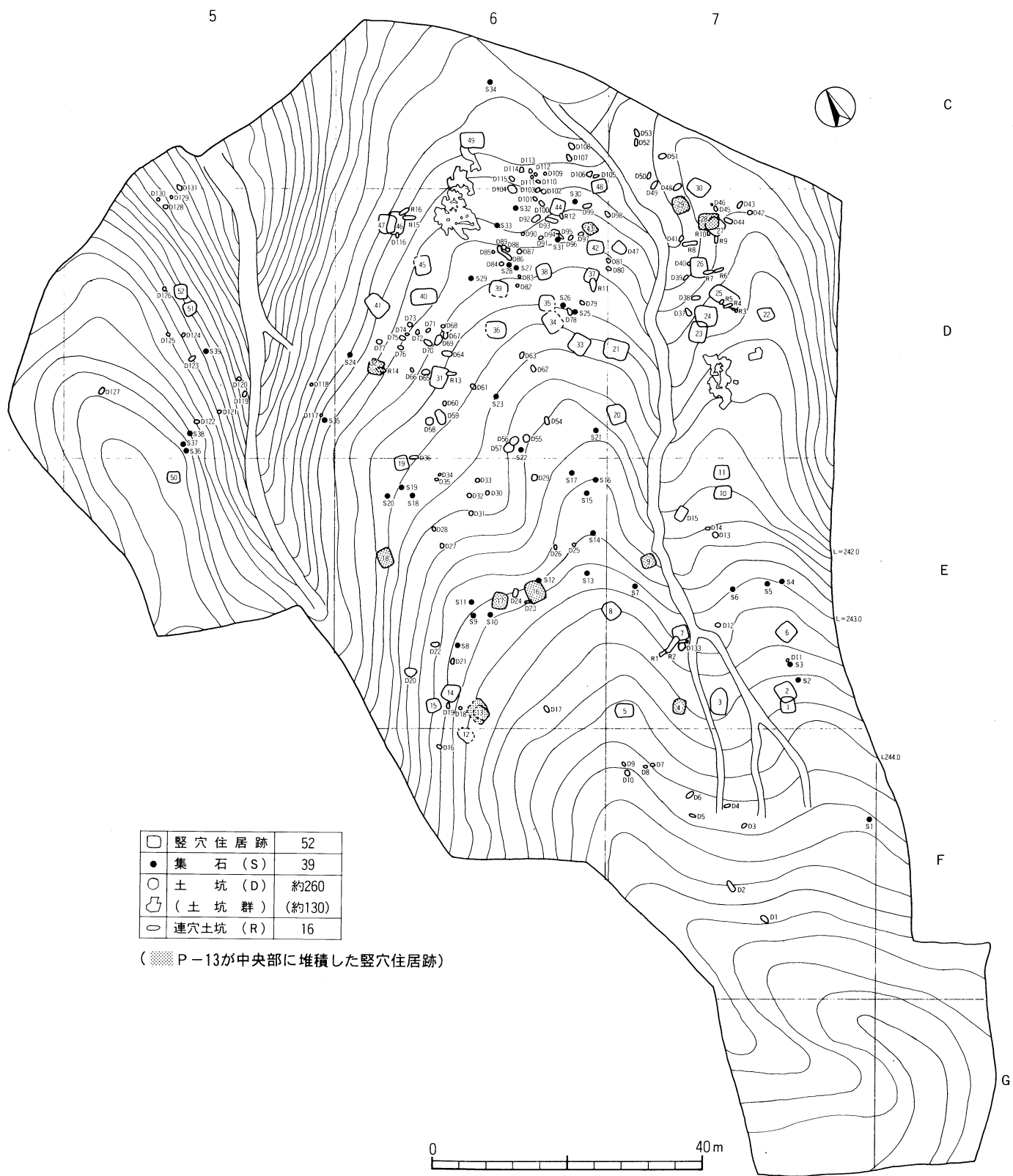
第9図 縄文時代早期中・後葉遺構配置図(第Ⅱ・Ⅲエリア)



第10図 縄文時代早期中・後葉遺構配置図(第IVエリア)



第11図 縄文時代早期中・後葉遺構配置図(第VIIエリア)



第12図 縄文時代早期前葉遺構配置図 (第IIエリア)

第V章 縄文時代早期前葉の遺構・遺物

第1節 遺構

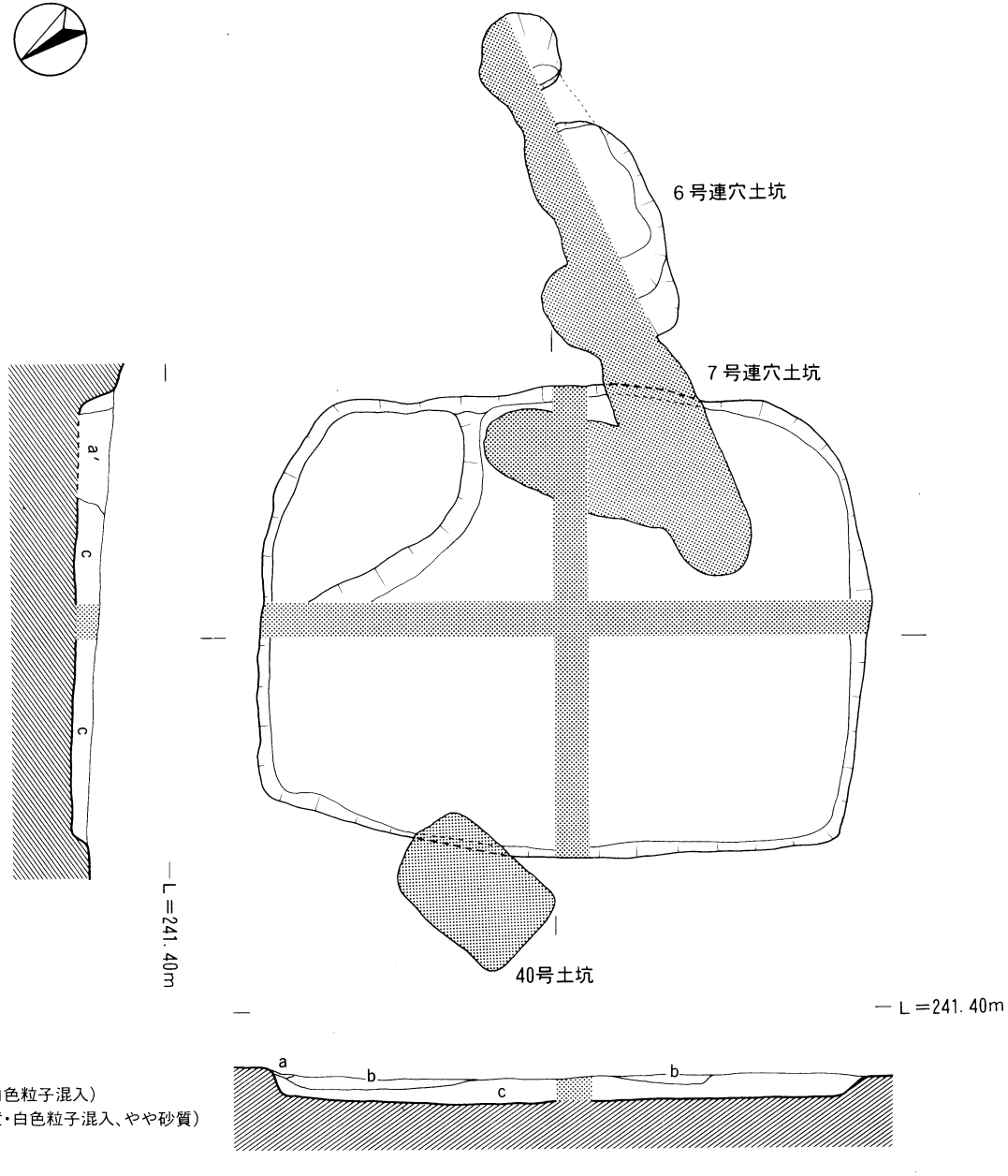
1 竪穴住居跡（第13・14図）

第Ⅱエリアの第10層上面において52基が検出された。図面上ではD・E-6・7区で、特にD-6・7区に集中する傾向にある。遺構は、主として南北に延びる2条の谷状地形（道跡の可能性あり）両側の尾根部分に展開している。プランの形状は隅丸方形・長方形の概略2タイプに分類でき、周囲に柱穴が確認できるもの、連穴土坑等によって切られているものもある。この中で、遺構内にP-13火山灰がレンズ状に厚く堆積するタイプについては、ほぼ正確な層位学的年代を得ることができた。その他のものについても遺構内埋土の状態によって数タイプに分類でき、これを慎重に分析・検討することにより遺構間の時間差、ひいては集落形態の変遷等を把握できると考えられる。

第11表 竪穴住居跡計測表

は、予想されるプラン・面積を示す。

| 検出面 | | | 床面 | | | 検出面 | | | 床面 | | | | |
|-----|-------|-------|---------------------|-------|-------|---------------------|----|-------|-------|---------------------|-------|-------|---------------------|
| 号数 | 長軸(m) | 短軸(m) | 面積(m ²) | 長軸(m) | 短軸(m) | 面積(m ²) | 号数 | 長軸(m) | 短軸(m) | 面積(m ²) | 長軸(m) | 短軸(m) | 面積(m ²) |
| 1 | 2.45 | 2.40 | 5.88 | 2.40 | 2.30 | 5.52 | 27 | 2.78 | 2.23 | 6.20 | | | |
| 2 | 3.15 | 2.80 | 8.82 | | | | 28 | 3.53 | 2.93 | 10.34 | 3.30 | 2.73 | 9.01 |
| 3 | 3.94 | 2.58 | 10.17 | 3.86 | 2.48 | 9.57 | 29 | 2.40 | 2.28 | 5.47 | 2.75 | 2.42 | 6.66 |
| 4 | 2.48 | 2.08 | 5.16 | | | | 30 | 3.30 | 3.00 | 9.90 | 3.16 | 2.92 | 9.23 |
| 5 | 2.72 | 2.16 | 5.88 | 2.62 | 2.08 | 5.45 | 31 | 3.49 | 2.55 | 8.90 | 3.37 | 2.42 | 8.16 |
| 6 | 2.60 | 2.56 | 6.63 | | | | 32 | 2.94 | 2.79 | 8.20 | 2.60 | 2.50 | 6.50 |
| 7 | 2.40 | 2.30 | 5.52 | | | | 33 | 3.40 | 3.08 | 10.47 | 2.92 | 2.88 | 8.41 |
| 8 | 2.82 | 2.37 | 6.68 | 2.76 | 2.27 | 6.27 | 34 | 3.50 | 2.85 | 9.98 | 3.20 | 2.75 | 8.80 |
| 9 | 2.22 | 2.10 | 4.66 | 2.02 | 2.02 | 4.08 | 35 | 2.90 | 2.40 | 6.96 | 2.85 | 2.25 | 6.41 |
| 10 | 2.80 | 2.12 | 5.94 | 2.74 | 2.08 | 5.70 | 36 | 2.70 | 2.57 | 6.94 | 2.57 | 2.55 | 6.55 |
| 11 | 2.42 | 2.30 | 5.57 | 2.36 | 2.20 | 5.19 | 37 | 2.15 | 2.00 | 4.30 | 2.00 | 1.95 | 3.90 |
| 12 | 2.80 | | | | | | 38 | 2.38 | 2.16 | 5.14 | 2.26 | 2.06 | 4.66 |
| 13 | 2.70 | | | | | | 39 | 2.70 | 2.65 | 7.16 | 2.53 | 2.50 | 6.33 |
| 14 | 3.00 | 2.10 | 6.30 | | | | 40 | 4.47 | 2.45 | 10.95 | 4.44 | 2.33 | 10.35 |
| 15 | 2.38 | 2.22 | 5.28 | 2.32 | 2.17 | 5.03 | 41 | 3.70 | 2.50 | 9.25 | | | |
| 16 | 3.55 | 2.88 | 10.22 | 3.44 | 2.77 | 9.53 | 42 | 2.70 | 2.30 | 6.21 | 2.52 | 2.24 | 5.64 |
| 17 | 2.62 | 2.44 | 6.39 | 2.53 | 2.35 | 5.95 | 43 | 2.20 | 2.05 | 4.51 | 2.08 | 1.94 | 4.04 |
| 18 | 2.98 | 2.10 | 6.26 | 2.94 | 2.02 | 5.94 | 44 | 2.51 | 2.23 | 5.60 | 2.40 | 2.14 | 5.14 |
| 19 | 3.20 | 2.77 | 8.86 | 2.85 | 2.60 | 7.41 | 45 | 3.20 | 2.98 | 9.54 | 2.90 | 2.57 | 7.45 |
| 20 | 2.97 | 2.79 | 8.29 | 2.86 | 2.68 | 7.66 | 46 | 3.84 | 2.82 | 10.83 | 3.53 | 2.51 | 8.86 |
| 21 | 3.80 | 2.92 | 11.10 | 3.65 | 2.84 | 10.37 | 47 | 2.50 | | | | | |
| 22 | 3.00 | 2.40 | 7.20 | 2.96 | 2.26 | 6.69 | 48 | 2.80 | 2.50 | 7.00 | | | |
| 23 | | | | | | | 49 | 3.20 | 2.20 | 7.04 | | | |
| 24 | 4.40 | 3.54 | 15.58 | 4.12 | 3.50 | 14.42 | 50 | 1.98 | 1.54 | 3.05 | 1.92 | 1.47 | 2.82 |
| 25 | 4.90 | 2.72 | 13.33 | 4.80 | 2.55 | 12.24 | 51 | 3.10 | 2.70 | 8.37 | 3.04 | 2.62 | 7.96 |
| 26 | 3.47 | 3.26 | 11.31 | 3.32 | 2.61 | 8.67 | 52 | 2.50 | 2.31 | 5.78 | 2.47 | 2.28 | 5.63 |

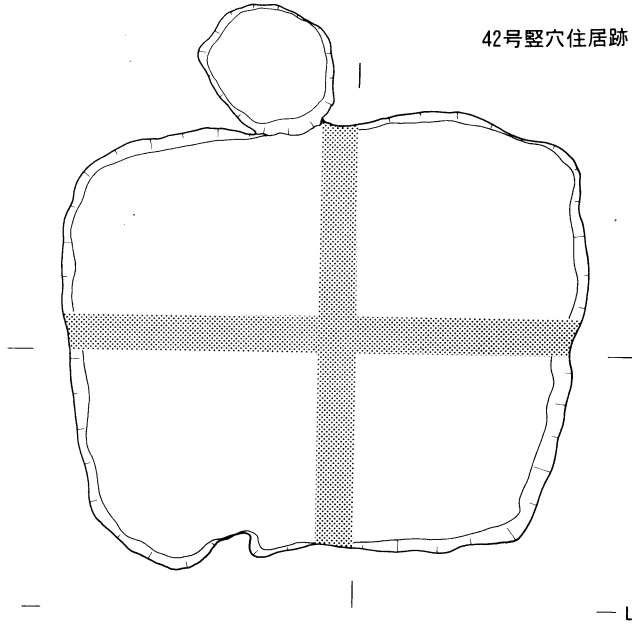


- a 黒褐色土(白色粒子混入)
- a' 黒褐色土(黄・白色粒子混入、やや砂質)
- b 茶褐色土
- c 黒茶褐色土

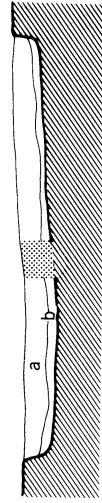
第13図 26号竖穴住居跡



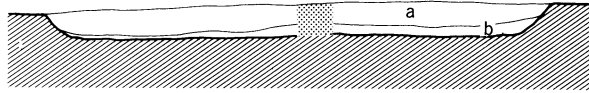
42号竖穴住居跡



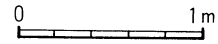
L = 241.20m



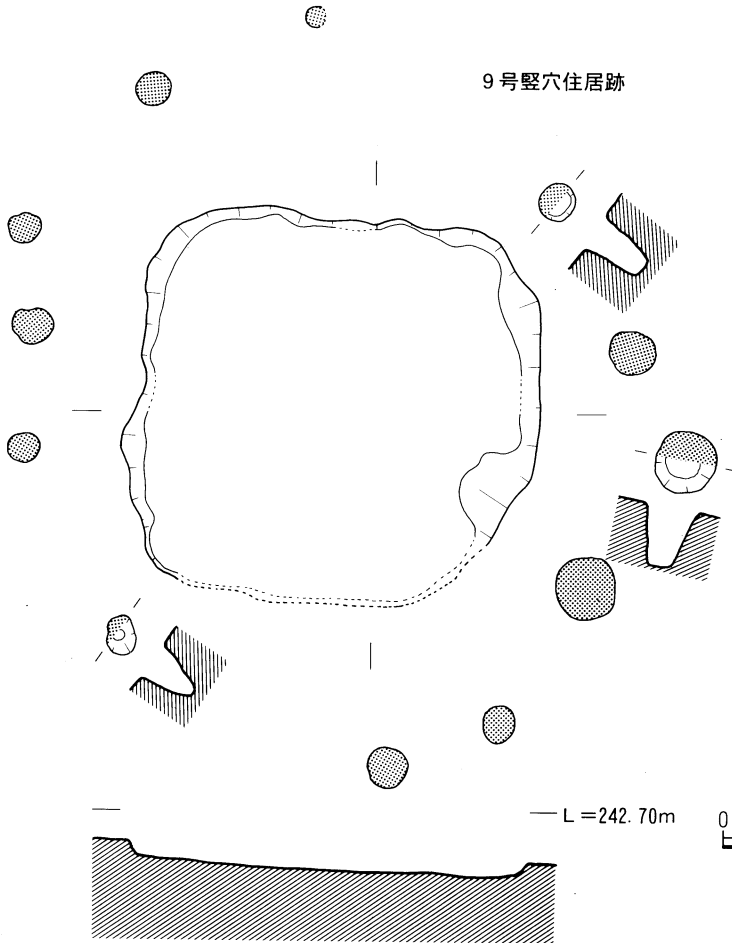
L = 241.20m



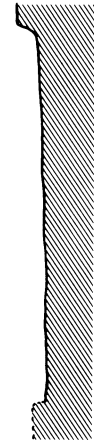
a 茶褐色土(黄色バミスを含む)
b 暗茶褐色土(わずかに粘質)



9号竖穴住居跡



L = 242.70m



L = 242.70m



第14図 42・9号竖穴住居跡

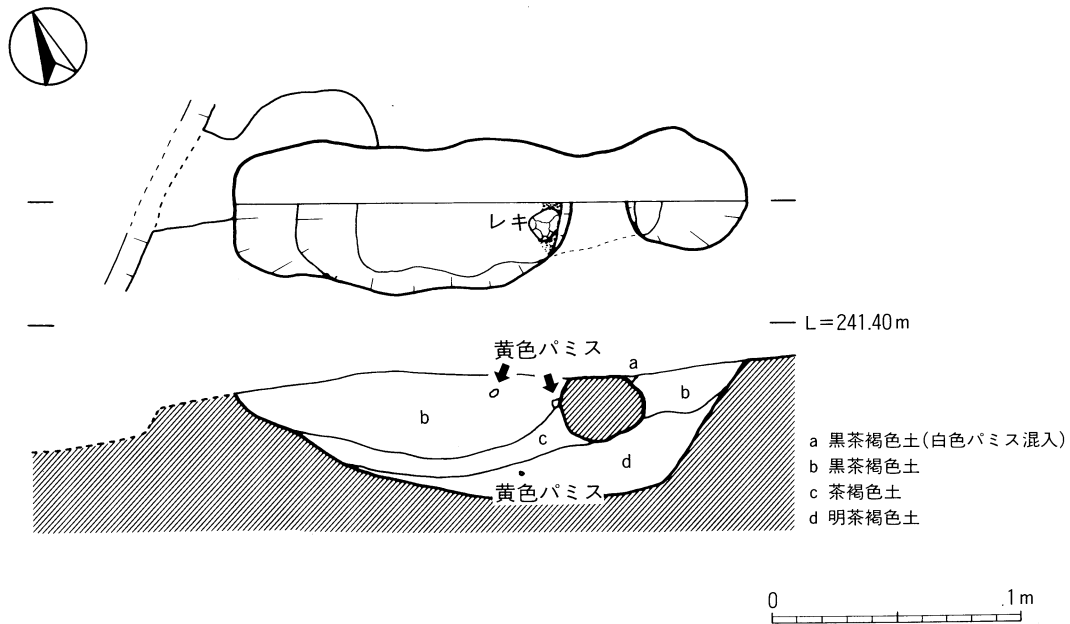
2 連穴土坑 (15・16図)

連穴土坑あるいは煙道付き炉穴と呼ばれているもので、縄文時代早期前葉に見られる遺構の一つである。当遺跡からは、16基が検出されたが、検出のみにとどめた土坑の中には連穴土坑の可能性のあるものも存在する。

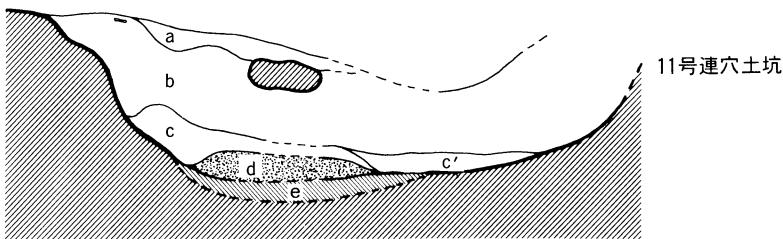
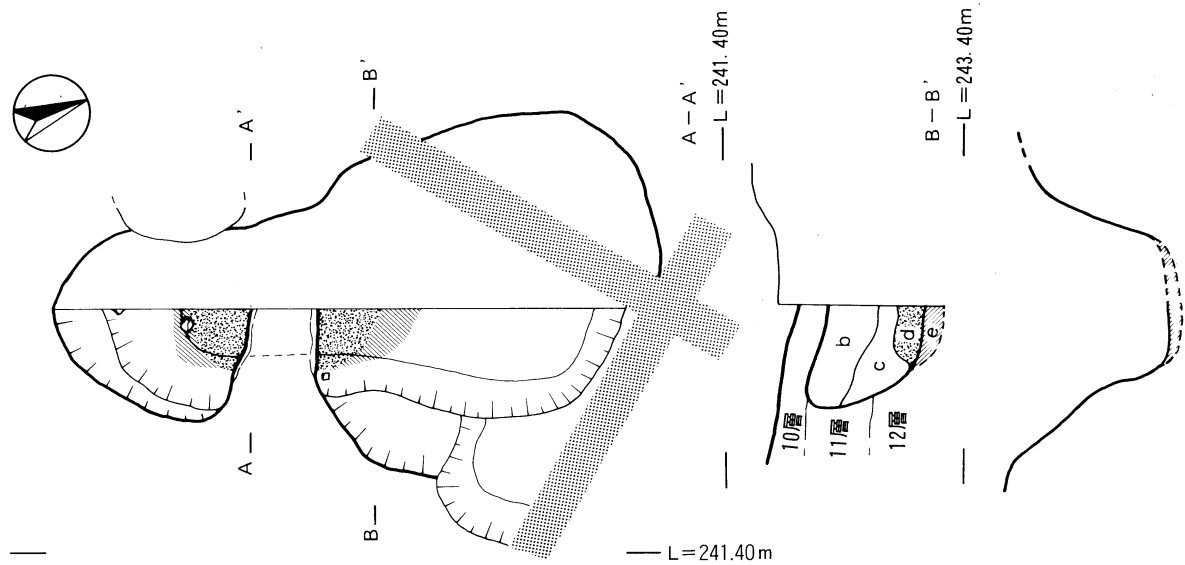
6・7号連穴土坑は、26号竪穴住居跡の東壁付近で検出された。7号連穴土坑は26号竪穴住居跡の東壁を掘り込んでおり、6号連穴土坑は、その延長上に検出された。6号連穴土坑はブリッジが残存し、そのブリッジ下の床面は硬化しており、焼土・炭化物が周辺に広がっていた。

2号連穴土坑はP-13火山灰と思われる埋土を有しており、プラン検出時においてP-13火山灰と思われる黄色パミスが長軸両端で弧状に堆積し、全面に硬くしまった黄・白色パミス混入の黒褐色土が見られた。半截してみると、この連穴土坑内にあるP-13火山灰はわずかに袖の残っているブリッジ部分を中心に弧状に堆積しており、七層に分層が可能であった。また、この連穴土坑は7号竪穴住居跡の西壁と切り合っており、2号連穴土坑の長軸延長上にミニトレンチを入れた結果、2号連穴土坑が7号竪穴住居跡を切っていることが判明した。この両者の関係は極めて重要であり、この埋土パターン同士が遺跡内の全ての遺構の新旧関係を示すかどうかは検討を要するが、いずれにせよ、2号連穴土坑と7号竪穴住居跡はP-13降下以前の遺構である可能性が高い。

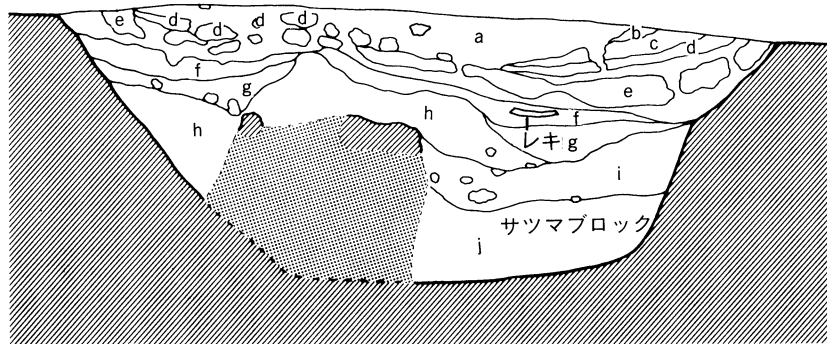
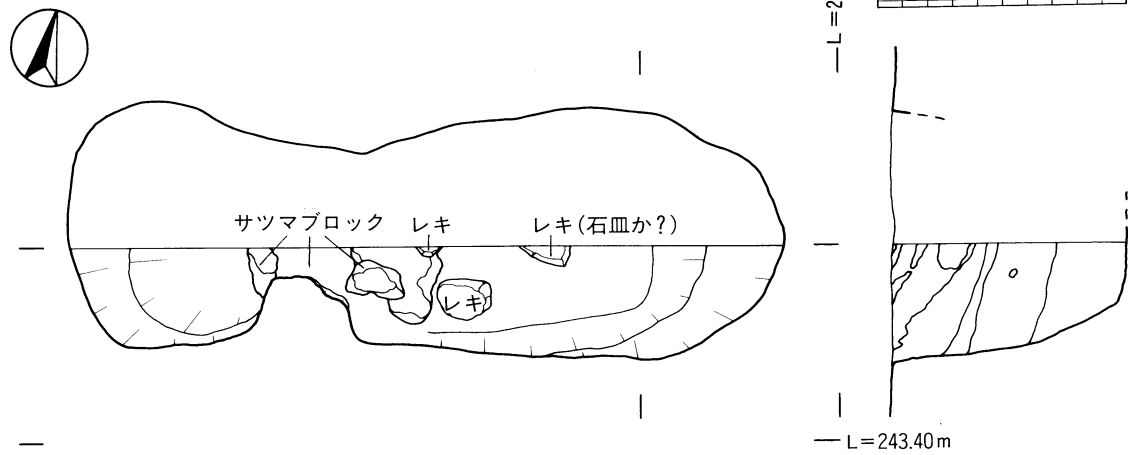
このように、連穴土坑は竪穴住居跡の一部と切り合って検出される場合が多く、今後住居との切り合い関係を慎重に検討していきたい。



第15図 6号連穴土坑



- a 茶褐色弱粘質土(白・黄色バミス混入)
- b 暗茶褐色粘質土(黄色バミス少量混入)
- c bと焼土ブロックの混土
- c' cより焼土ブロックの割合少
- d 赤橙色焼土
- e 焼成により硬化した12層



- a 黒褐色土(白・黄色バミス混入)
- b 黄色バミス
- c 灰褐色硬質土
- d 黄色バミス
- e 黄色バミス(砂質)
- f 明茶褐色土(オレンジバミス混入)
- g 茶褐色土
- h 黒茶褐色土
- i 茶褐色土
- j 暗茶褐色土(わずかに粘質)

2号連穴土坑

第16図 11・2号連穴土坑

3 集石遺構 (第17図)

縄文時代早期前葉の集石は、39基確認された。ほぼ全域に認められるが、D-6・E-6・E-7区に集中して検出された。大別すると、掘り込みを有するものと、掘り込みを有しないものに分けることができる。掘り込みを有するものは、土坑状の黒色プランが検出され、掘り込みが明確に確認できた。また、礫の密度・規模・礫の大きさにも違いが見られた。大半が安山岩の角礫や円礫の自然石からなるが、石皿片や磨石を含む集石も認められた。

保存のため完掘していないことから、明確な掘り込みの深さは確認できず、半截や未掘のものは礫の数にも違いがでてくる可能性がある。

第12表 集石遺構計測表

| 番号 | 区 | 類別 | 長径×短径 (cm) | 掘り込みの大きさ (cm) 長径 × 短径 × 深さ | 礫数 | 備考 |
|----|-----|-----|------------|-------------------------------|-----|-------|
| 1 | F-7 | B-b | 57×37 | | 12 | |
| 2 | E-7 | A-b | 34×10 | 110×76×30 | 4 | 樹根混入 |
| 3 | E-7 | A- | 52×18 | 88×75×不明 | 4 | 未掘 |
| 4 | E-7 | A-a | 87×62 | 110×82×20 | 16 | |
| 5 | E-7 | A-a | 69×67 | 96×88×15 | 26 | |
| 6 | E-7 | A-b | 94×80 | 111×90×15 | 39 | |
| 7 | E-7 | A-a | 29×26 | 63×52×25 | 4 | ベルト未掘 |
| 8 | E-6 | B-a | 70×62 | | 17 | |
| 9 | E-6 | A-b | 34×20 | 103×93×30 | 5 | |
| 10 | E-6 | B-a | 150×118 | | 106 | |
| 11 | E-6 | A-b | 64×43 | 108×102×25 | 10 | |
| 12 | E-6 | A-b | 63×44 | 96×92×15 | 8 | 半截 |
| 13 | E-6 | A- | 67×51 | 84×76×不明 | 10 | 未掘 |
| 14 | E-6 | A-b | 42×17 | 85×52×30 | 7 | 半截 |
| 15 | E-6 | B-a | 160×120 | | 65 | |
| 16 | E-6 | B-a | 57×50 | | 23 | |
| 17 | E-6 | B-b | 84×58 | | 20 | |
| 18 | E-6 | A-b | 40×20 | 98×86×20 | 5 | |
| 19 | E-6 | A-b | 58×36 | 85×71×28 | 8 | |
| 20 | E-6 | A-b | 35×32 | 100×88×18 | 7 | |
| 21 | D-6 | A-a | 33×30 | 81×59×不明 | 10 | 未掘 |
| 22 | D-6 | A- | 45×25 | 155×71×不明 | 7 | 未掘 |
| 23 | D-6 | B-b | 164×48 | | 57 | |
| 24 | D-6 | B-a | 63×31 | | 12 | |
| 25 | D-6 | B-a | 102×73 | | 36 | |
| 26 | D-6 | A- | 不明 | 70×65×不明 | 不明 | 未掘 |
| 27 | D-6 | A-b | 114×94 | 148×129×20 | 35 | ベルト未掘 |
| 28 | D-6 | A-b | 52×46 | 73×69×15 | 9 | ベルト未掘 |
| 29 | D-6 | B-a | 103×58 | | 21 | |
| 30 | D-6 | A-b | 41×24 | 111×75×20 | 6 | 半截 |
| 31 | D-6 | A-a | 68×31 | 85×53×10 | 31 | ベルト未掘 |
| 32 | D-6 | B-b | 136×96 | | 31 | |
| 33 | D-6 | A- | 40×35 | 77×71×10 | 4 | 未掘 |
| 34 | C-6 | B-a | 49×30 | | 12 | |
| 35 | D-5 | A-a | 85×77 | 100×93×10 | 50 | |
| 36 | E-5 | B-a | 160×96 | | 84 | |
| 37 | D-5 | B-a | 102×88 | | 67 | |
| 38 | D-5 | B-b | 106×92 | | 33 | |
| 39 | D-5 | A-b | 117×100 | 216×149×15 | 19 | ベルト未掘 |

集石遺構の類別

| | |
|------|-----------------------|
| A-a類 | 掘り込みを有し、礫が密集しているもの |
| A-b類 | 掘り込みを有し、礫がまばらなもの |
| B-a類 | 掘り込みを有しないで、礫が密集しているもの |
| B-b類 | 掘り込みを有しないで、礫がまばらなもの |



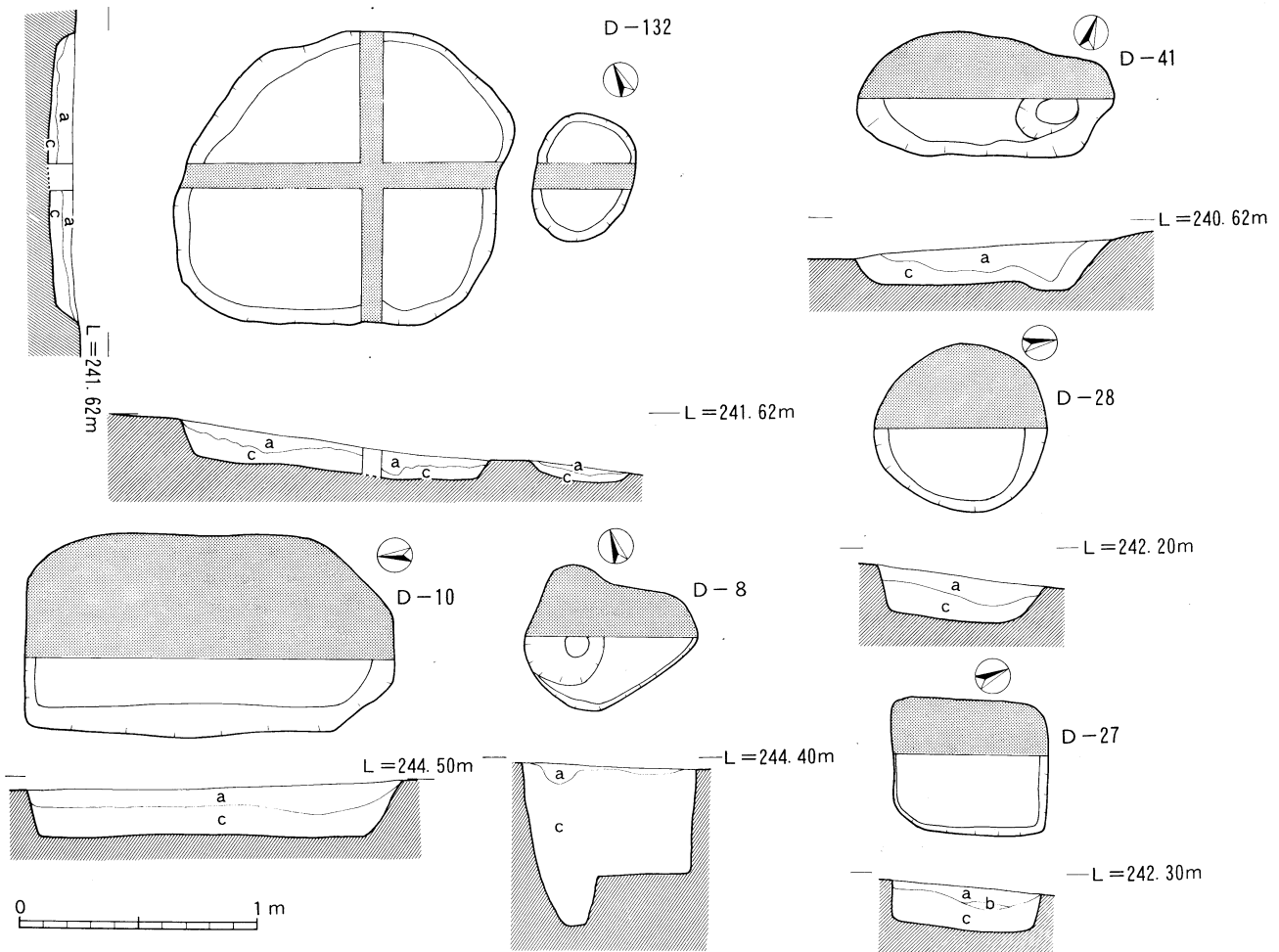
第17图 5·6·10号集石

4 土坑 (第18図)

土坑は、調査区全域に分布しているが、D-7区に約50基、C・D-6区に約80基集中して検出された。形態は、円形・長方形、長楕円形の概略3類が確認された。

第13表 土坑概要

| 形態 | 規 模 | 基 数 |
|-------|-----------------------------------|-----|
| 円 形 | 直径が約150・100・70cmの3つに分類。深さは20~10cm | 31基 |
| 長 方 形 | 長辺が約160・90・60cmの3つに分類。深さは40~20cm | 13基 |
| 長楕円形 | 長軸が約180・120・90cmの3つに分類。深さは30~20cm | 88基 |



第18図 132・41・10・8・28・27号土坑

- a 黒褐色(白・黄色パミス混入)
- b 黄色パミス
- c 茶褐色土

5 道跡 (第12図)

C-6・7区、D・E・F-7区とC・D・E-7区、F-5区、G-7区の谷部が道筋と考えられる。その方向は、概略南北である。この部分は、空中写真で観察すると、黒い筋状に撮影されている部分で、遺構も重なっていない。この道跡は、自然の浅い谷を利用したと考えられ、上部にはP-13起源の白色パミスが堆積していた。

集落を考える上で、この部分は道の役割を果たしたものと考えられる。

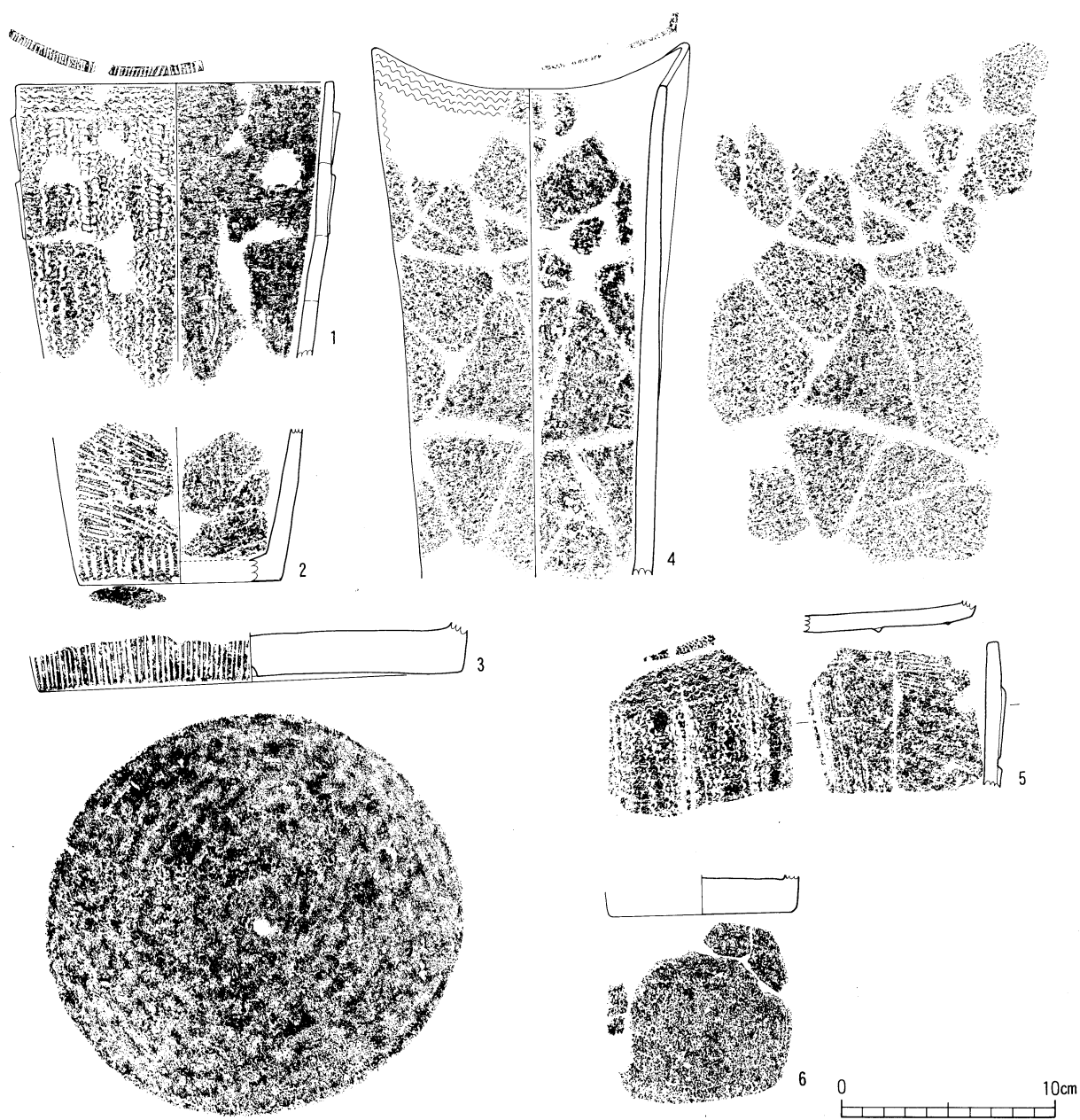
第2節 出土遺物

1 土器

土器は、遺構内出土遺物、早期前葉の第9層・第7層出土遺物、その他の早期の出土遺物に分けて掲載した。

(1) 遺構内出土の土器 (第19図 1～6)

遺構内の代表的な出土土器を挙げた。これらは、南九州に分布する前平式土器である。この土器の主な遺跡の地名表および分布は、第II章第3節で示したように、鹿児島県・宮崎県に多い。



第19図 遺構内出土の土器(縄文時代早期前葉)

第14表 遺構内出土の土器観察表

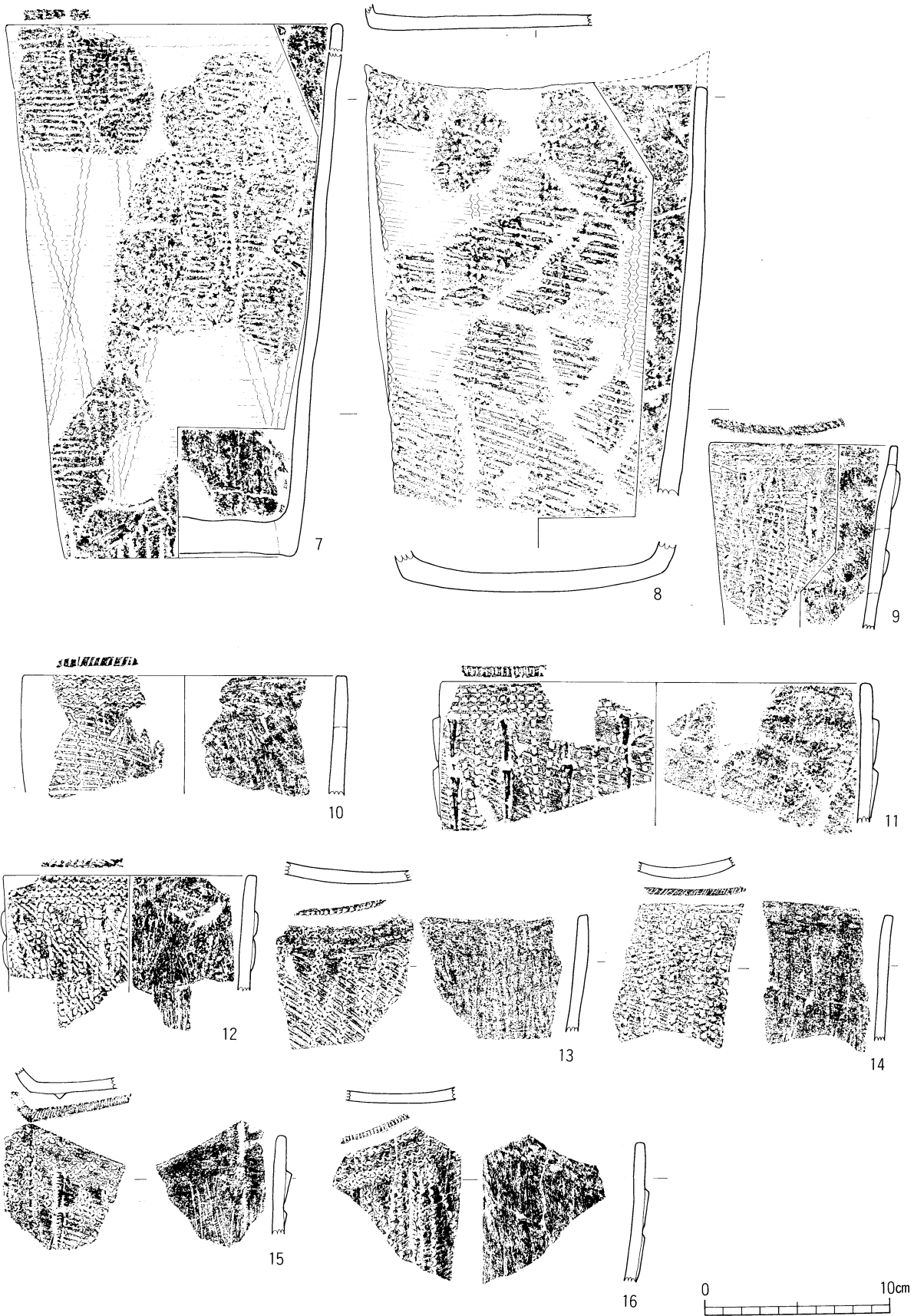
| 番号 | 出土区 | 遺構名 | 器形 | 色調 | 焼成 | 文様等 |
|----|-----|---------|------|------|----|--|
| 1 | D-6 | 11号連穴土坑 | 円筒 | 黒茶褐色 | 硬質 | 口唇部に刻み目, クサビ形凸帯, 貝殻腹縁による条痕と刺突を施す。 |
| 2 | D-6 | 46号住居跡 | 円筒平底 | 黒茶褐色 | 軟質 | 貝殻腹縁による条痕と刺突を施す。 |
| 3 | E-6 | 15号住居跡 | 円筒平底 | 茶褐色 | 硬質 | 細い線で縦位の刻み目, 中央部に孔入の痕跡がある。 |
| 4 | D-6 | 35号住居跡 | 角筒 | 茶褐色 | 軟質 | 貝殻腹縁による縦位の全面刺突を施す。 |
| 5 | D-6 | 31号住居跡 | 角筒 | 茶褐色 | 軟質 | 口唇部に刻み目, クサビ形凸帯, 貝殻腹縁による縦位及びX状の刺突文を施す。 |
| 6 | D-6 | 45号住居跡 | 角筒平底 | 茶褐色 | 軟質 | 表面が剥離しているため文様不明である。 |

(2) 縄文時代早期前葉の土器 (第20図 7~16)

ここでは遺構内以外の包含層中出土土器の中から, 前平式土器を抽出し, その一部を掲載した。

第15表 縄文時代早期前葉の土器観察表

| 番号 | 出土区 | 出土層 | 器形 | 色調 | 焼成 | 文様等 |
|----|-----|-----|------|------|----|--|
| 7 | C-6 | 9 | 円筒平底 | 明茶褐色 | 軟質 | 口縁部と胴部は貝殻腹縁による横位の条痕の上に2本平行の貝殻刺突文を縦位とX状に施す。底部は深い縦位の刻みである。 |
| 8 | C-6 | 9 | 角筒 | 茶褐色 | 軟質 | 文様構成は7と同類である。 |
| 9 | D-5 | 9 | 円筒 | 黒茶褐色 | 軟質 | 貝殻腹縁による条痕の上に, 縦位の2本平行とX状の貝殻刺突。クサビ形凸帯を縦位に貼付けている。 |
| 10 | C-6 | 7 | 円筒 | 暗茶褐色 | 硬質 | 口唇部に刻みを付け, 口縁部は貝殻腹縁による横位の刺突, その下は貝殻腹縁による条痕の上に, 貝殻で1本の縦位とX状刺突を施す。 |
| 11 | F-7 | 7 | 円筒 | 茶褐色 | 硬質 | 文様は10と同類である。その上にクサビ形凸帯を施す。 |
| 12 | D-7 | 7 | 円筒 | 茶褐色 | 硬質 | 基本的には, 11と同類であるが, Y字状の貝殻刺突を施している。 |
| 13 | D-7 | 7 | 角筒 | 暗茶褐色 | 硬質 | 基本的には, 12と同類である。 |
| 14 | D-7 | 7 | 角筒 | 暗茶褐色 | 硬質 | 基本的には, 11と同類である。 |
| 15 | D-7 | 7 | 角筒 | 明茶褐色 | 硬質 | 基本的には, 10と同類である。クサビ形凸帯 |
| 16 | E-7 | 7 | 角筒 | 暗茶褐色 | 硬質 | 基本的には, 11と同類である。 ” |



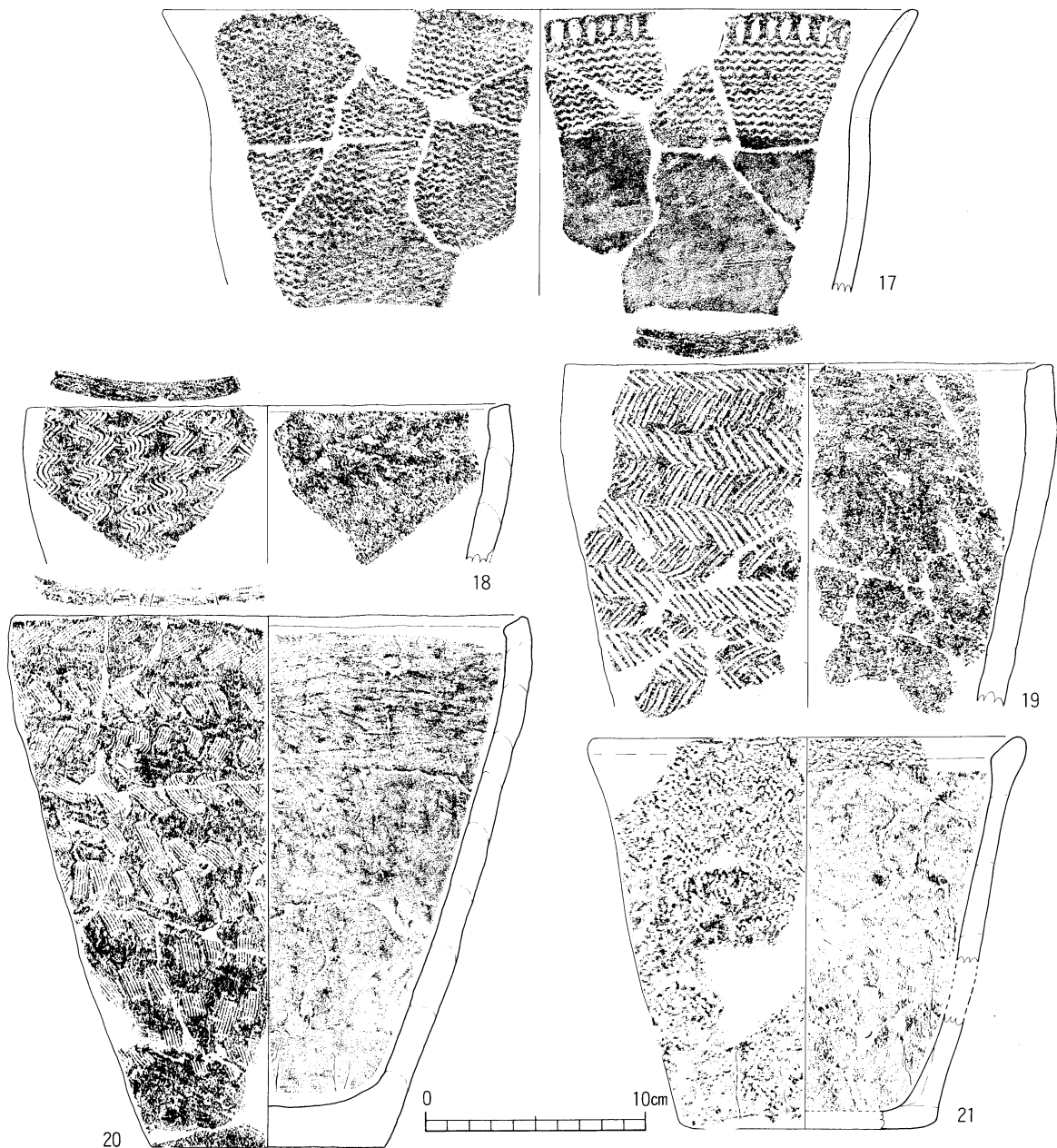
第20図 縄文時代早期前葉の土器(7～9は第9層・10～16は第7層)

(3) その他の縄文時代早期の土器 (第21図 17~21)

第IVエリアの主な出土遺物で、押型文土器と撚糸文土器と桑ノ丸タイプの土器である。出土層は第7層であった。

第16表 その他の縄文時代早期の土器観察表

| 番号 | 出土区 | 出土層 | 形式 | 色調・焼成 | 文様等 |
|----|------|-----|--------|--------------|---------------------------|
| 17 | E-9 | 7 | 押型文土器 | 茶色・もろい | 口縁部内面と外面に山形押型文を横位に施す。 |
| 18 | F-10 | 7 | 桑ノ丸タイプ | 茶褐色・硬質 | 貝殻腹縁により縦位に流水文を施す。 |
| 19 | F-10 | 7 | 桑ノ丸タイプ | 茶褐色・硬質 | 貝殻ないし櫛歯状施文具により横位に斜め交互に施す。 |
| 20 | F-10 | 7 | 桑ノ丸タイプ | 上暗茶褐色下茶褐色・硬質 | 貝殻腹縁による条痕を斜め交互に施す。 |
| 21 | F-10 | 7 | 五十市式土器 | 上暗茶褐色下茶褐色・硬質 | 口縁部内面と外面全体に撚糸文を施す。 |



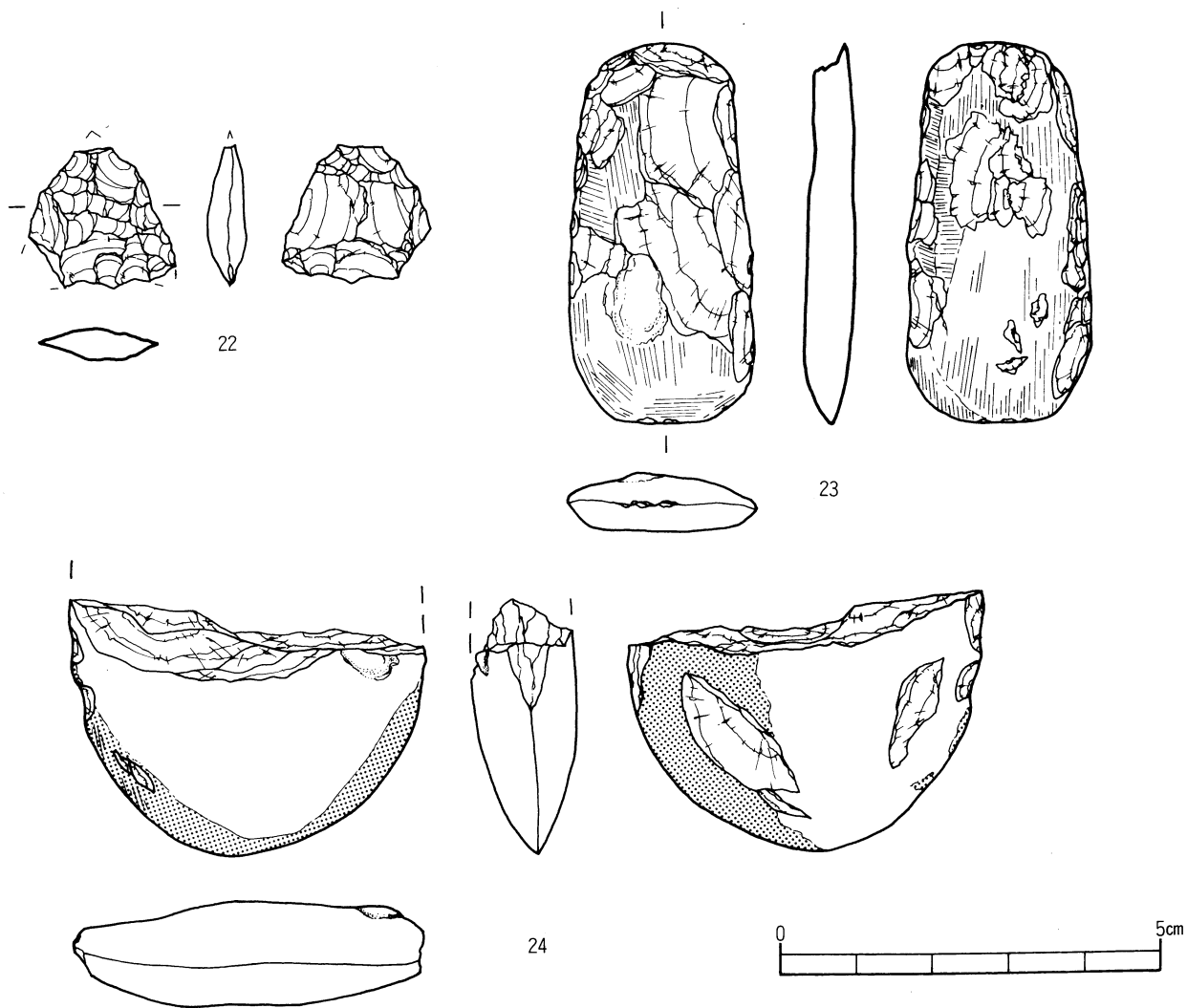
第21図 その他の縄文時代早期の土器

2 石器

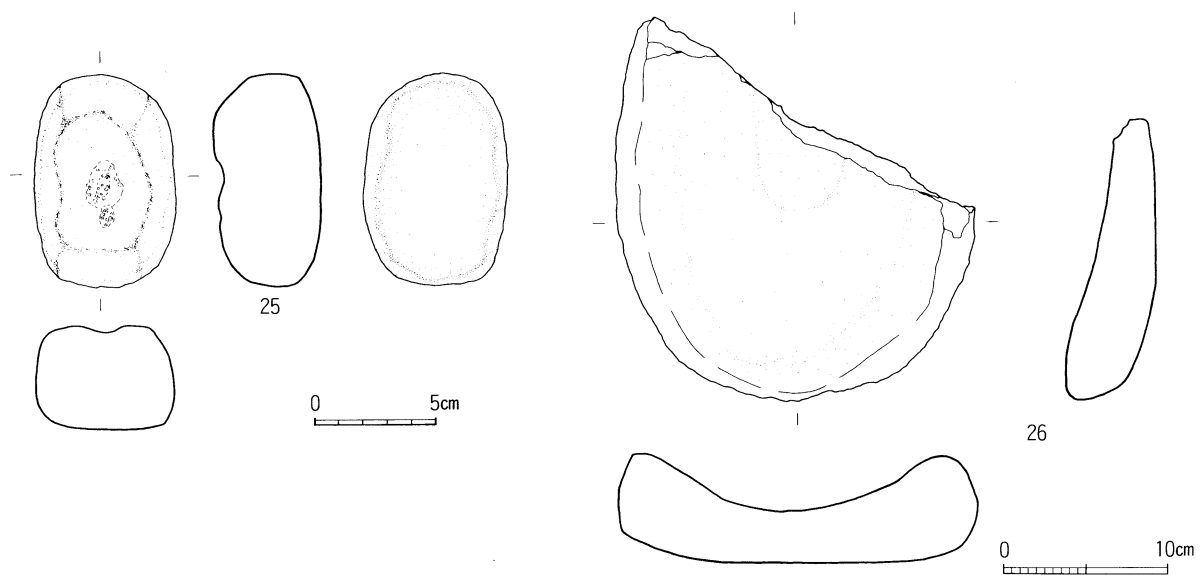
(1) 遺構内出土の石器 (第22・23図 22~26)

第Ⅱエリアにおける縄文時代早期前葉の遺構内出土石器は、点数が少ないが一定の器種バリエーションが確認できた。ここでは器種別に1点ずつ掲載した。

22 (43号住居内) は、チャート製の石鏃である。各先端部は欠損しているが、ほぼ三角形を呈し、抉りはみられない。23 (24号住居内) は、頁岩製の小型局部磨製石斧である。両側縁に荒い敲打調整痕がみられ、表裏面及び刃部は比較的丁寧に研磨されている。24 (43号住居内) は、頁岩製磨製石斧である。全体的に風化が激しいため、研磨痕など細部の状態は不明である。25は、34号集石内より検出された磨石(凹石)で、ほぼ直方体を呈す。同集石は破損した石皿も利用している。同様の集石は他にも存在し、遺構内遺物間での接合例(石皿)も確認された。26 (3号住居内) は、中央に大きな窪みをもつ石皿で、崩壊し易い石材のためか顕著な使用痕は観察されなかった。



第22図 遺構内出土の石器(1)



第23図 遺構内出土の石器(2)

(2) 縄文時代早期の遺物包含層中の石器 (第24～26図 27～47)

27～40は、第7層中から出土した石器である。

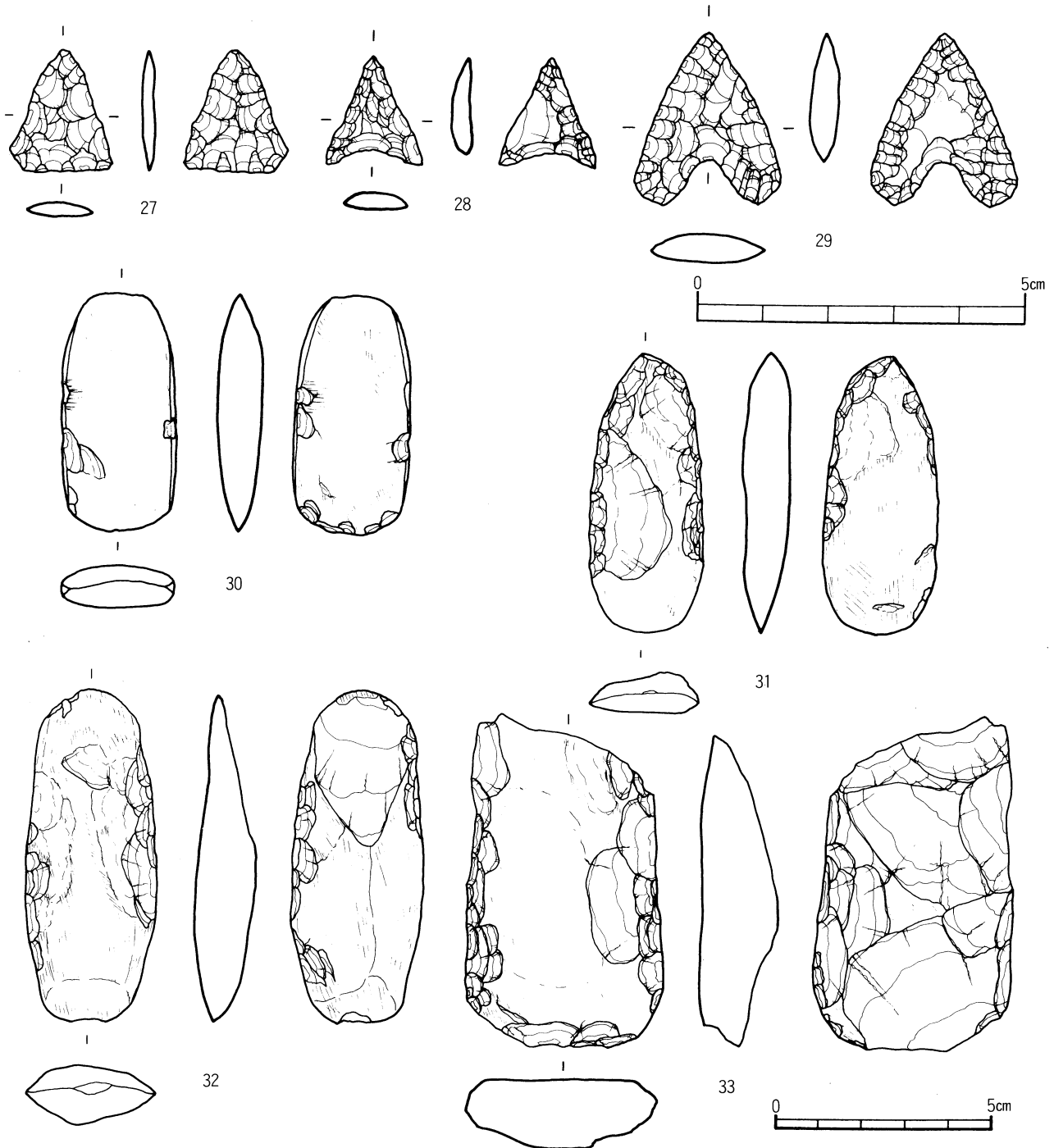
27～29は石鏃である。27は、小型のもので非常に薄く仕上げられているチャート製の石鏃である。28は、黒曜石製でわずかに抉りが見られる。29は、一部に主要剥離面を残し、均一な剥離を有する抉りのある黒曜石製の石鏃である。30は、砂岩製の小型磨製石斧で、刃部はわずかに丸味を呈し、側面中位に横位の擦痕が見られる。31は、刃部を入念に磨き、わずかに丸味を呈する片刃の局部磨製石斧で、基部がやや尖る。32は、硬質頁岩製のもので刃部は両刃である。両頭状を呈しており、共に使用によると考えられる剥離痕が見られる。33は、やや大きめのもので、研磨ののち再加工と考えられる剥離を全面に施している。34は、刃部が欠損しているが片刃のノミ状を呈するものと考えられる。35は、刃部がノミ状を呈する磨製石斧である。側面を敲打により整形している。刃部欠損後に荒い研ぎ直しが見られる。また、側面中位には横方向の擦痕、基部には剥離痕が見られる。36は、刃部が片刃に近く丸味を呈するが、裏面が平坦なために厳密な意味での丸ノミ状ではない。一部に素材礫皮面を有する。刃部付近の研磨が特に入念に施され、刃部は刃こぼれの後研ぎ直しを行っている可能性が高い。また、両側面には一部摩耗している部分もあり、装着痕の可能性もある。37は、頁岩製の敲石である。38は、安山岩製の磨石で、直方体を呈するものである。これが整形によるものなのか使用による結果なのかは判断できなかった。磨石はこのほかにも円形あるいは楕円形のものもあり、直方体のものは比較的少ない。39・40は、石皿である。39は、安山岩製で、全面を楕円形に整形し中央部が使用により窪んでいる。40は、全面を整形し中央部が使用によりわずかに窪む。

41～43は、第6層から出土した石器である。

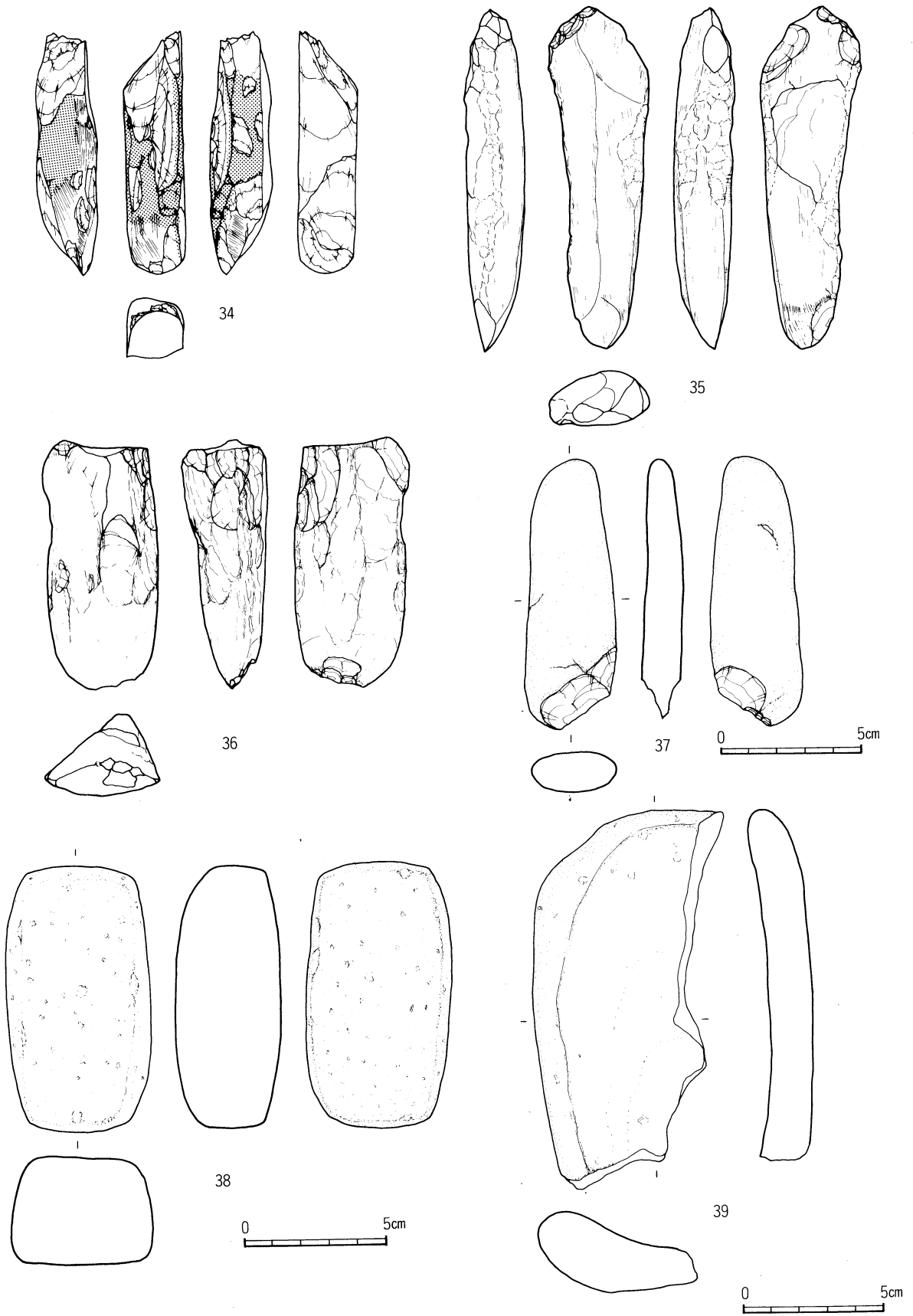
41は、比較的薄手の磨製石斧で両刃である。42は、ハリ質安山岩製で礫皮面が片面に残り、荒い剥離を片面にのみ施していることから、石斧の未製品である可能性が高い。43は、小型の磨石と思われるものである。

44～47までは、第IVエリアから出土した縄文時代早期の石器である。

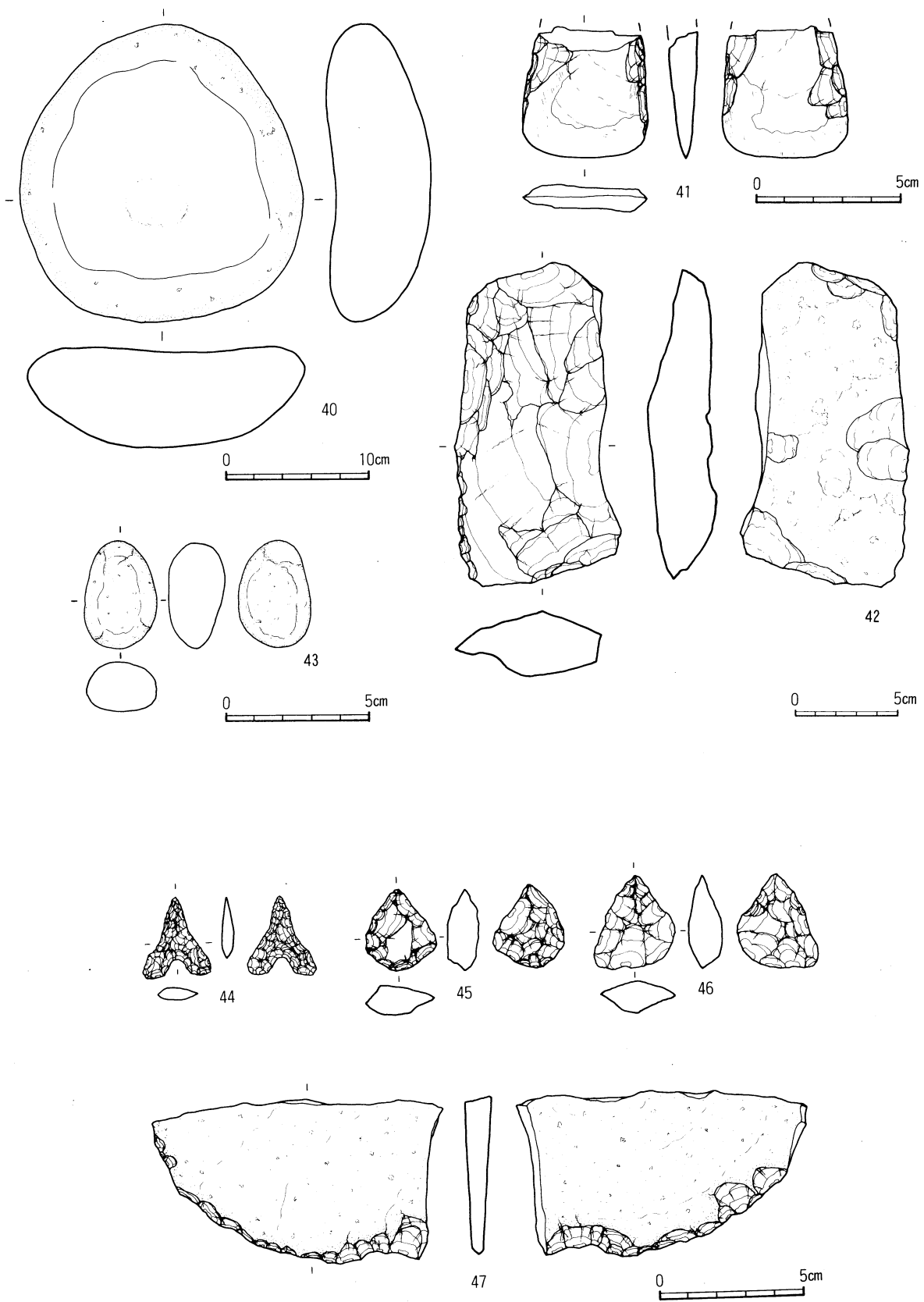
49は、シルト質頁岩製の抉りのある石鏃である。45・46は、いずれも荒い剥離が全面に施されているもので、尖頭状石器と呼ばれているものであるが、石鏃の未製品である可能性もある。45・46は、チャート製である。47は、礫器である。偏平な風化安山岩を用いて、側辺部に加工を施し刃部を形成している。



第24図 縄文時代早期の遺物包含層中の石器(1)



第25図 縄文時代早期の遺物包含層中の石器(2)



第26図 縄文時代早期の遺物包含層中の石器(3)

第Ⅵ章 縄文時代早期以降の遺構・遺物

1 縄文時代前期

遺構は検出されなかった。遺物は、竈式系土器と曾畑式土器が第Ⅱエリアの第5層中より出土している。出土量は少ない。

2 縄文時代後期

遺構は検出されなかった。遺物は、指宿式土器と市来式土器が第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴエリアの第4層に出土している。出土量は少ない。

3 縄文時代晩期（第7・29図）

遺構は竪穴住居跡が第Ⅴエリアに2基、土坑が第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴエリアに28基、掘立柱建物が第Ⅱ・Ⅲ地点に2基検出された。

竪穴住居跡は、H-9区に楕円形、H-10区に円形プランのものが検出された。土坑は、炭化したドングリが多量混入するものがH-7・8区とE-7区で6基検出され、少量のものがF-7区で1基検出された。他に石皿を廃棄したものが、G・H-8区で1基ずつ検出された。

遺物は、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶエリア全域に出土しているが、第Ⅱ・Ⅲエリアに最も多い。土器は、大半が黒川式土器で、石器では、石皿・磨石・打製石斧などが多量に出土している。

4 弥生時代（第7・29図）

遺構については、第7図及び第17表のとおりである。遺物は、中期初頭の入来式土器と中期末～後期初頭の山ノ口式土器等が出土した。

第17表 弥生時代遺構一覧

| エリア | 遺構名 | 規模・形態 | 数 | エリア | 遺構名 | 規模・形態 | 数 |
|-----|------|-------|----|-----|-------------|-------|------|
| Ⅱ | 1号住居 | 方形 | 1基 | Ⅶ | 1号周溝状遺構 | 大型円形 | 1基 |
| Ⅱ | 2号住居 | 方形 | 1基 | Ⅴ | 2号周溝状遺構 | 小型円形 | 1基 |
| Ⅱ | 3号住居 | 大型方形 | 1基 | Ⅴ | 3号周溝状遺構 | 円形 | 1基 |
| Ⅱ | 4号住居 | 大型方形 | 1基 | Ⅲ | 棟持柱付掘立柱建物跡 | | 1基 |
| Ⅱ | 5号住居 | 大型方形 | 1基 | Ⅳ | 環状柵列付掘立柱建物跡 | | 1基 |
| Ⅱ | 6号住居 | 円形 | 1基 | Ⅲ | 円形柵遺構 | | 44基 |
| Ⅶ | 1号住居 | 花卉状円形 | 1基 | Ⅱ～Ⅴ | 柵跡 | | 約60列 |
| Ⅶ | 2号住居 | 方形 | 1基 | Ⅱ～Ⅴ | 杭跡 | ランダム | 多数 |

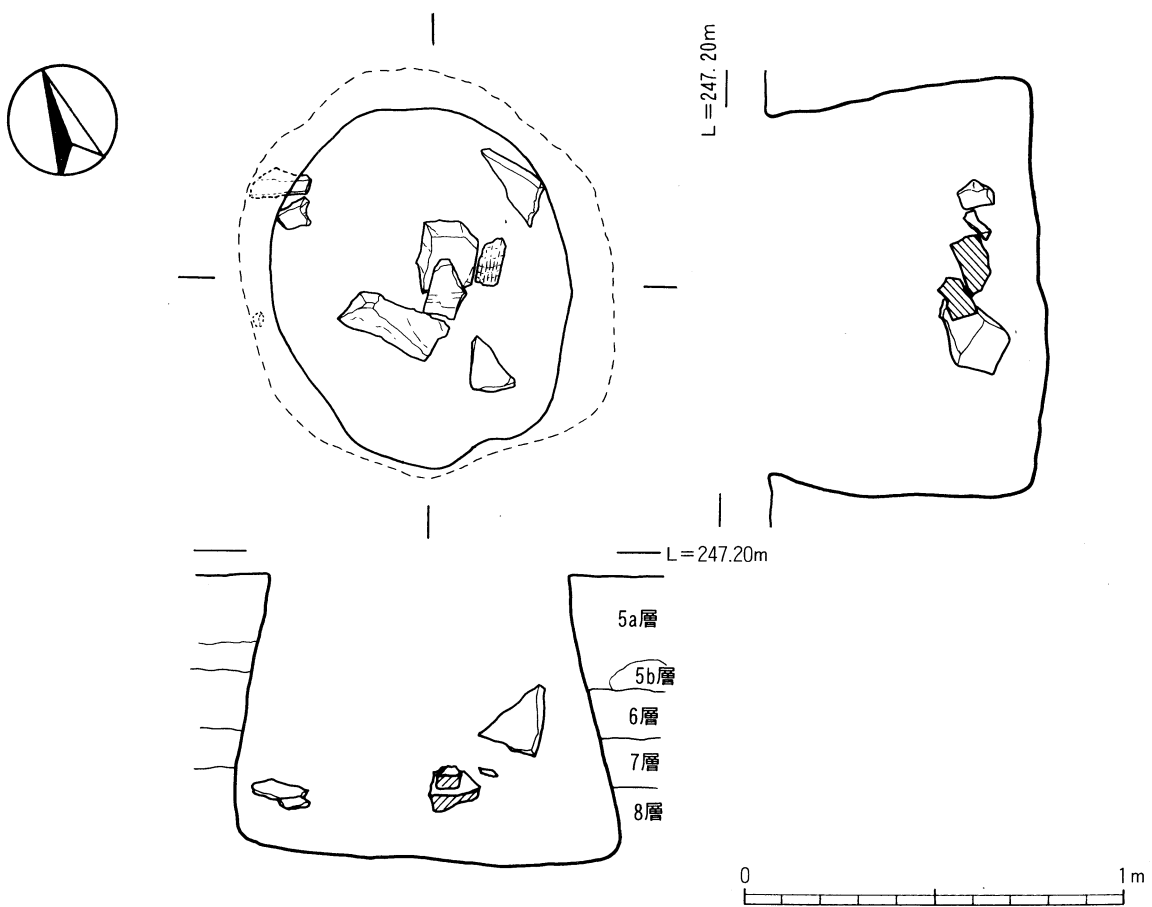
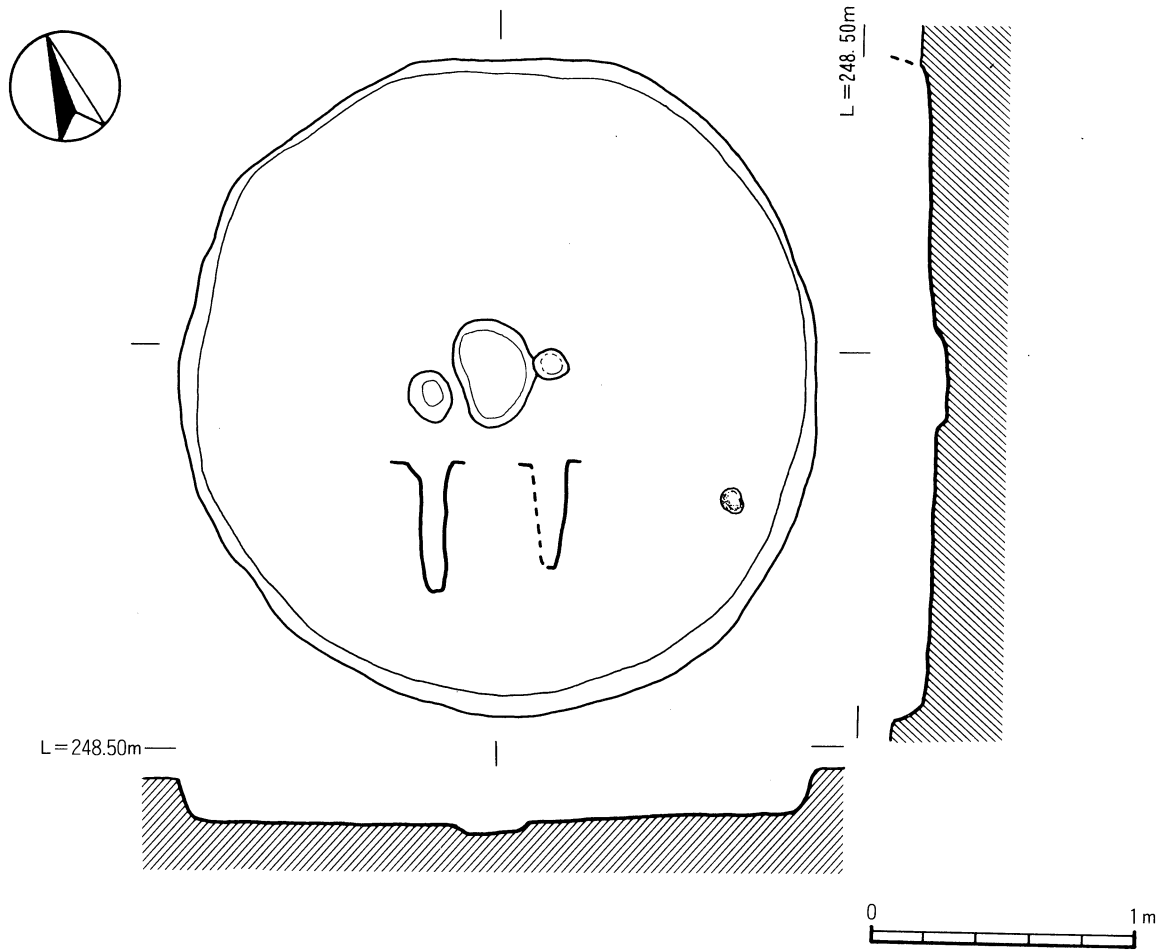
5 古墳時代（第7図）

G-6区に日向型間仕切住居跡が検出された。この住居跡は弥生時代の柵跡を切るような状態で検出され、3部屋に分かれる竪穴や、中央の炉跡が確認された。

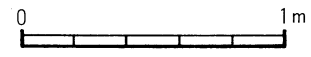
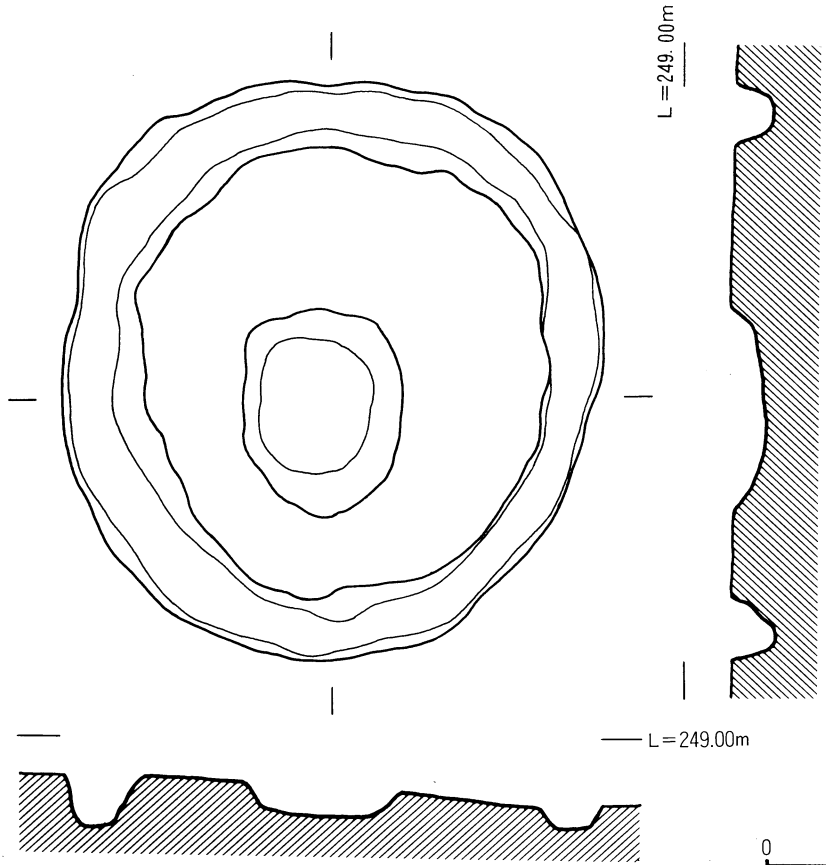
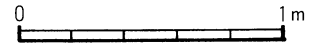
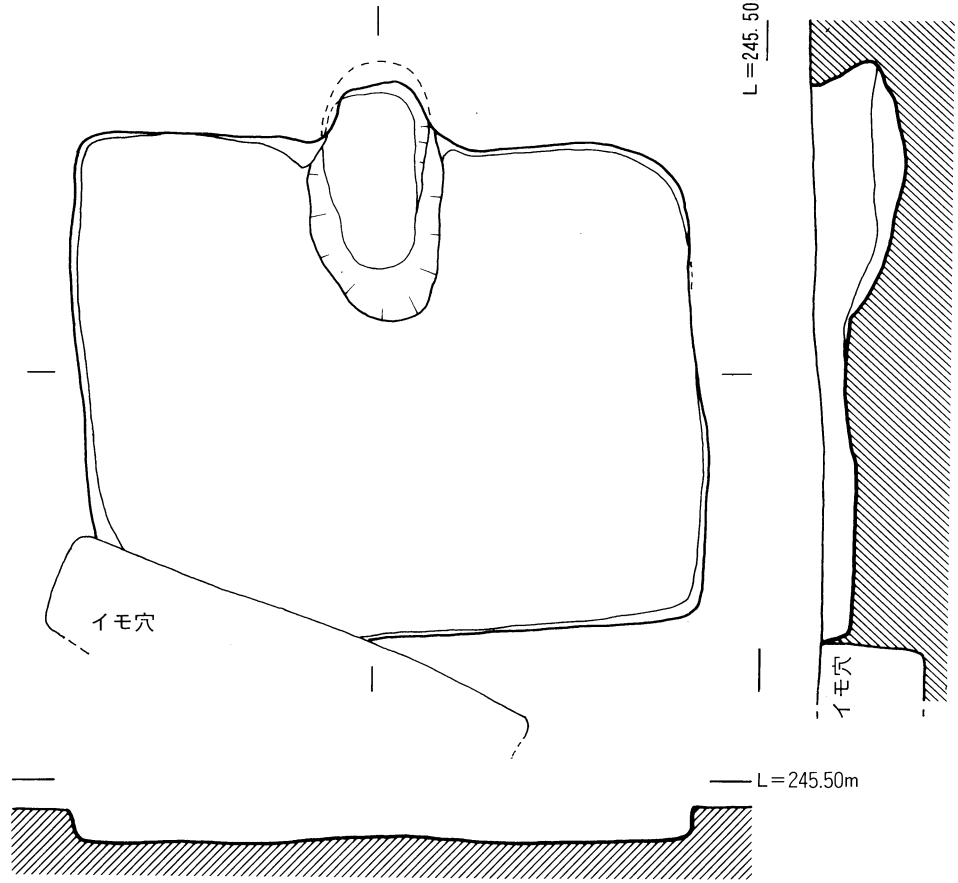
遺物は、成川式土器の甕形土器、鉢形土器、蓋形土器等があり完形品が多く出土した。

6 古代（第7図）

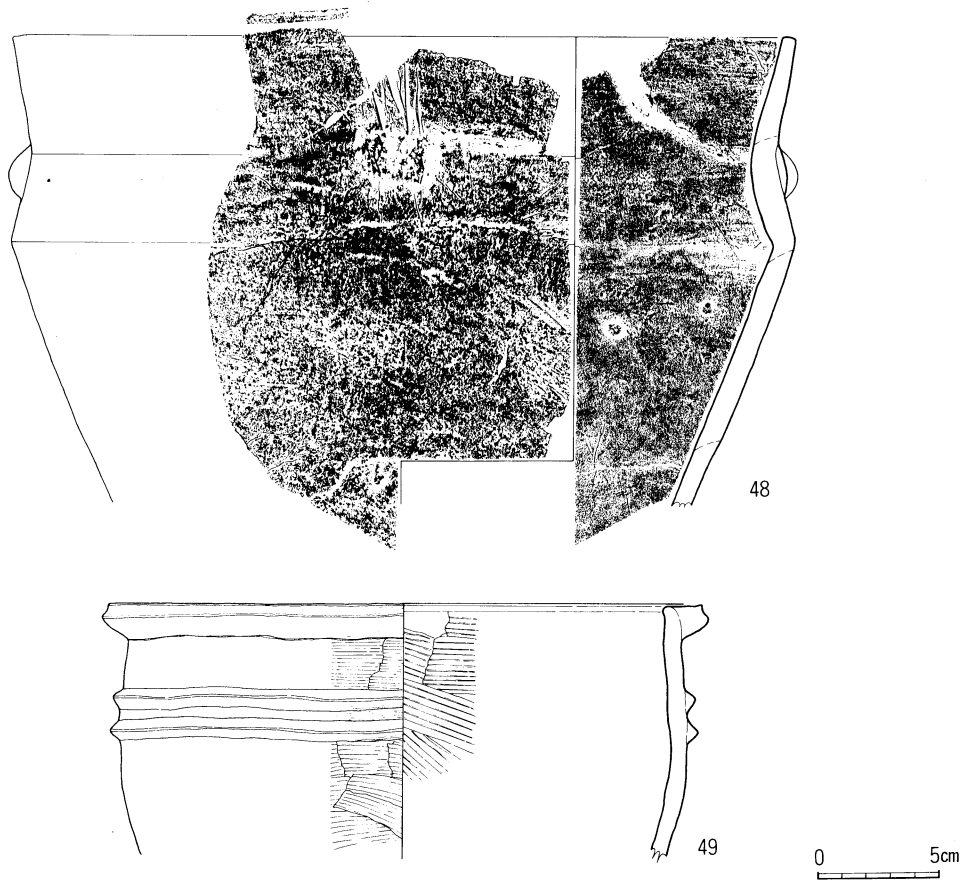
溝がB・C-7区からD-4～7区にかけて検出された。検出部分の総延長は約150mを測り、平均して幅約80cm、深さ約70cmであった。C-7区の部分は道路で切り取られており、B-7区以



第27図 縄文時代晩期の2号竪穴住居跡・6号土坑



第28図 弥生時代の1号竪穴住居跡・2号周溝状遺構



第29図 縄文時代晩期と弥生時代の土器

北は未調査であるが、舌状台地を巡るように延びるものと思われる。

時期は、土師器が埋土上部より出土したことから、古代と考えられる。また遺構内からは、縄文時代晩期や弥生時代の土器も出土した。

7 中・近世（第7図）

B-6・7区，C・D-5区・D-4区において5本の古道が確認された。その中の2本は，薄黄色の文明ボラに覆われ，他3本はそれらを切るような状態で検出された。前2本は，室町時代の文明年間（1471年）以前で，後3本は，それ以後に構築されたと思われる。後3本の埋土中には白色の軽石が混入しているが，これらは後の時期のもの（安永か大正）と思われる。

第Ⅶ章 まとめ

1 はじめに

上野原遺跡の第4工区は、平成7年度から平成9年度にかけて発掘調査を実施し、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中・近世にわたる複合遺跡であることが確認された。中でも、縄文時代早期前葉の集落跡、縄文時代早期の集石遺構群、縄文時代晩期の集落跡、弥生時代中期の集落跡等が注目される。

これらの詳細については、今後作成する本報告において述べることとし、本章では、県教委が平成9年5月26日に発表した縄文時代早期前葉の国内最古・最大級の集落について、現時点で明らかになった事実及び諸問題等について以下述べることにする。

2 縄文時代早期前葉の集落跡

(1) P-13火山灰の発見と層位について

遺跡における桜島起源のP-13火山灰の発見は、平成7年度の調査時において第Ⅶエリアでの鹿児島大学理学部助教授小林哲夫氏の指導によるものであった。その内容は、P-11とP-14間の軽石層を観察し、この地域であればP-13火山灰の可能性が高いとの指摘であった。

この層は、谷部では明瞭に分層できるが、尾根部でははっきりしなかったため、平成7年度は標準層位には含めなかった。

平成8年度の調査では、白色・黄色パミスが、第Ⅱエリアの谷部の第7層下部及びP-14上面で検出された遺構内に確認され、再度小林氏の指導により約9,500Y. B. Pの値であるP-13火山灰との指摘を受けた。さらにこの火山灰の軽石を古環境研究所に依頼し分析した結果、P-13火山灰に由来するものであることが判明し、同時に約9,500Y. B. Pの値であることも再確認できた。

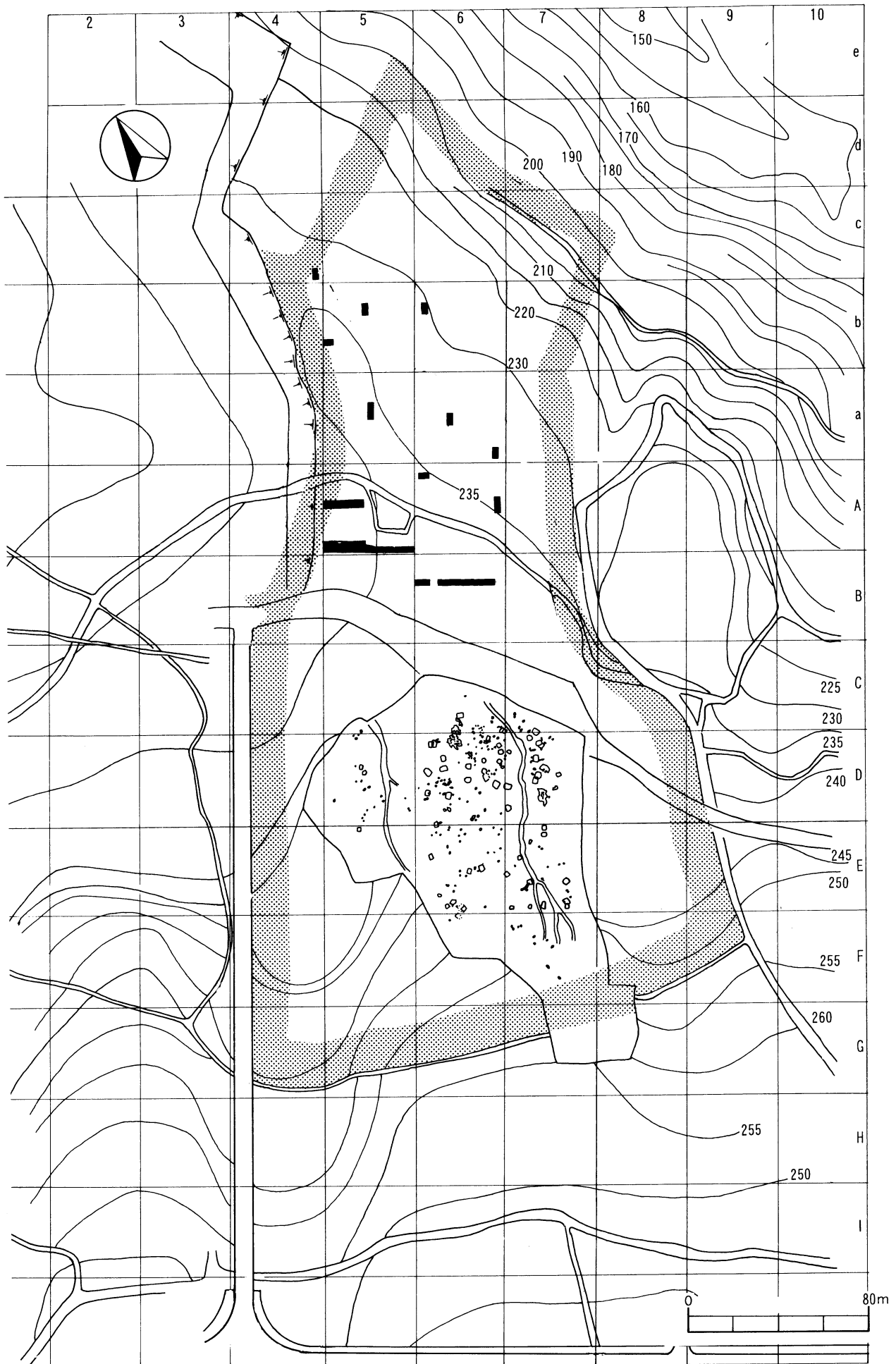
この層は遺跡全体を密に覆うものではなく、谷部及び一部の遺構内に集中して堆積し、その他の場所においては、白色のゴマシオ状粒子（以下ゴマシオ）として観察された。

層序では、平成7年度に含めなかったP-13起源と考えられるゴマシオを含む黒色土を平成8年度では第8層、その下の軽石を含まない粘質の強い黒茶褐色土を第9層、P-14を第10層とした。

この第9層を追加した理由は、P-13を挟む層相互の状況は微妙かつ複雑であるが、第10層（P-14）上面で遺構が確認され、その掘り込みにP-13の一時降下物を内包する遺構が存在した為である。これは、即ち理論上第9層が存在することを意味する。

土層は、第10層がP-14の腐蝕されていない火山灰で、第9層がP-14の腐植土である。そして、第8層の軽石はP-13の腐蝕されていない火山灰で、ゴマシオを含む黒色土はP-13の腐植土としてとらえている。

問題点としては、P-13がゴマシオ化していく過程がまだ不明瞭で、生成システムを解明する必要があり、本報告に向けての作業の一つと考えている。



第30図 縄文時代早期前葉の遺跡範囲

(2) 集落の遺構と遺跡の範囲

集落は第12図で示したように、第Ⅱエリアの約13,000㎡に拡がり、尾根部に竪穴住居跡52基、集石遺構39基、連穴土坑16基、土坑約260基が確認され、谷部に2本の道跡がみられた。

竪穴住居跡の平面プランは、隅丸方形・長方形の形態で、柱穴が確認されたものが18基であった。柱穴は、竪穴の周りに巡る形で垂直に掘り込まれていた。その他については柱穴が確認されなかった。

竪穴住居跡の深さは約20～30cmであった。この竪穴は埋土に特徴があり、時期判断に役立つ①②③の検出状態の資料を得た。

- ① 竪穴の埋土にP-13火山灰がみられず、茶褐色の色調を示すもの。
- ② 竪穴の中央部にP-13がみられ、周りは茶褐色の色調を示すもの。
- ③ 竪穴の埋土全体にP-13やゴマシオ化したP-13がみられ、下部は茶褐色の色調を示すもの。

一例を挙げるならば、②の埋土パターンの竪穴住居跡が10基（4・9・13・16・17・18・28・29・32・43号竪穴住居跡）検出された。なお、これらは詳細分析に至っていないが、遺構の切り合い関係を確認するための良い資料であった。

集石遺構は、掘り込みの中に平石を中央に組むものや掘り込みの中に小礫が散在するものと、平坦な所に積み上げているものがあり、これらを石蒸し料理の遺構と仮定すれば、それぞれが意味を持つものと思われる。掘り込みを持つ集石は24基確認された。検出は土坑の方が先に確認される状況で、土坑の埋土は黒色土であった。これは、土壌の性質上第9層に由来するものと考えている。

連穴土坑の検出状況は、P-13がその中に厚く堆積しているものが2基あり、第9層に由来する埋土が上面からあるものが14基であった。この連穴土坑においては、竪穴住居跡と他の連穴土坑とが切り合って検出される例が多く、廃棄遺構を意識的に選択使用したことが考えられる。

土坑は、集中しているところが2か所あり、この中の一基を土壌分析中である。土坑の検出状況は連穴土坑の中の14基と類似していたが、埋土の上部にはゴマシオがみられるものも検出された。円形の土坑には、小礫が数個あるものもあり、集石遺構の範ちゅうに入る可能性も考えられる。

道跡は谷部に2条確認された。いずれも、黒色化しており空中写真で明瞭に確認することができ、遺構との重なりもほとんどみられない。道跡の範囲は平成9年度に追加調査をした結果、北部の舌状台地まで延びていることが確認された。

遺跡の範囲は、第30図で示した通り約56,000㎡以上に及ぶことがわかった。

(3) 遺物について

本遺跡における縄文時代早期前葉の主要遺物は、いわゆる前平式土器と呼称される土器の範ちゅうに含まれるものである。

当土器は、第6層下部～第7層にかけてと、第9層と遺構内に出土する。前者は出土量が多く、縄文時代早期中葉～後葉の遺物も同時に出土する。後者は、第8層の無遺物層を挟んで下位に出

土する。すなわち、純粋に当形式の土器のみを含むのは、P-13以下の層である。

現在、各層及び遺構内出土の土器の分析途中であるので詳細は避けるが、次に概報作成時の遺物の傾向を述べることにする。第1～6図と第20図の7・8・9は、第9層及び遺構内出土である。7と8は第9層中の円筒土器と角筒土器である。両方の特徴は、貝殻文で横位の条痕の地文に2本の平行刺突文をX状に施している。住居跡出土の遺物も貝殻による横位の条痕を地文とし、平行刺突文とX状の貝殻刺突文の組み合わせである。第7層出土の土器は、2本の平行刺突文が無く1条の貝殻刺突文でX状や縦位に施している傾向がみられる。

なおクサビ形凸帯文は、第9層及び第7層にも出土しているが、現在分析中であるため傾向はつかめない状態である。しかし、この凸帯には長い米粒状のものと逆2等辺三角形のものがみられる。

鹿児島市川上町加栗山遺跡は、同様の土器が出土した竪穴住居跡16基を含むの集落遺跡である。この遺跡は、放射性炭素測定では、 $8,890 \pm 130$ ・ $9,150 \pm 160$ ・ $9,390 \pm 130$ Y. B. Pの年代が出ている。この遺跡の住居内の出土遺物には貝殻刺突X文の前平式土器と鹿児島県始良郡栗野町山崎B遺跡にみられる貝殻押圧連続文の前平式土器がある。

分析途中の現時点でいえる一つの傾向としては、上野原遺跡の第7層の前平式土器が加栗山遺跡の土器に類似している様である。

石器としては、第9層には磨製石斧や石皿・磨石等が出土している。第7層にはノミ状石斧が出土しており、生活用具の多様化がみられる。

3 総括

上野原遺跡の集落が形成されたのは、火山灰から判断すると第8層の約9,500年以前、第10層の約11,500年以後となる。これは、北海道函館市中野B遺跡の初期集落の約7,500年より約2,000年以上古くなり、P-13火山灰降下年代からみると、国内で最古・最大級の定住集落と言える。

地質年代において、氷河期の洪積世と温暖期の沖積世は約1万年前で区別されている。上野原遺跡はまさに氷河期が終わる頃と考えてよい。この時期に南九州にこの様な大集落が存在していたことは、気候の変化によるものと考えられる。

南九州においては、P-14下の旧石器時代終末に当たる細石器時代に鹿児島市加治屋園遺跡・横井竹ノ山遺跡等細石器に土器が伴う遺跡がある。また、細石器を伴わず、土器だけの遺跡である鹿児島市掃除山遺跡・加世田市柵ノ原遺跡等がある。これは、南九州において縄文文化が先駆けて発生、そして急激な発達があったことを意味している。

その時期の気候は、氷河期の終わり頃のため冷涼な気温と考えられる。上野原遺跡でも土壌分析をした結果、第9層ではクマザサ・ネザサの竹亜科やコナラ属・ブナ属等のプラントオパールが検出され、地質年代の気候に合致した結果になった。また、量は少ないがヒエ属・エノコログサ属等栽培種ともとられるプラントオパールが検出され、木の実だけに頼っていなかった生活が想像される。

最近、南九州の縄文時代草創期(約13,000～11,000年前)の遺跡発掘調査報告例が増え、縄文文化の発生から発達を考える上で、研究が進み、定住集落論が展開されるようになり、それが、上野

原遺跡の評価につながったと考えられる。

さらに上野原遺跡は、縄文草創期からの流れが、早期前葉の上野原遺跡につながる縄文文化の南の先進性を裏付けていることを示唆し、国内における古い時期の縄文文化を解明する資料を提供した遺跡の一つと言えよう。

〈参考文献・指導等〉

小林哲夫 「P-13」について指導

加藤芳朗 「加栗山遺跡-加栗山遺跡・加治屋園遺跡の土層調査と土壌分析-」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(16) 1981

河口貞徳 「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」 『鹿児島県考古学学会紀要』4号 1955

野間重孝 「宮崎県の円筒土器」『考古学論叢』4 1977

鹿児島県教育委員会 「加栗山遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(13) 1981

鹿児島県教育委員会 「加治屋園遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(14) 1981

鹿児島県教育委員会 「山崎B遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(18) 1981

鹿児島市教育委員会 「掃除山遺跡」 『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12) 1992

鹿児島市教育委員会 「横井竹ノ山遺跡」 『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(10) 1990

加世田市教育委員会 「柗ノ原遺跡」 『加世田市埋蔵文化財発掘調査概報』 1994

版 圖



上野原遺跡全景



土層断面



土層と遺構

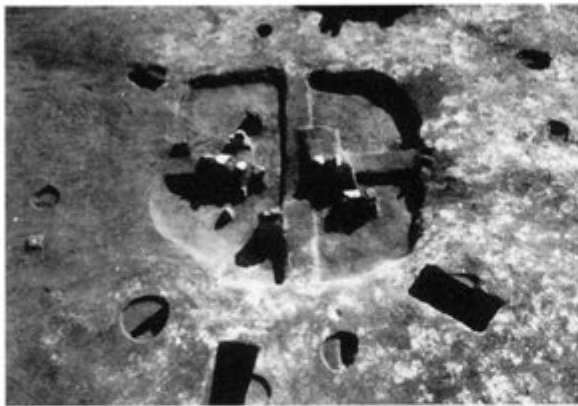


遺構検出状況（縄文時代早期前葉）

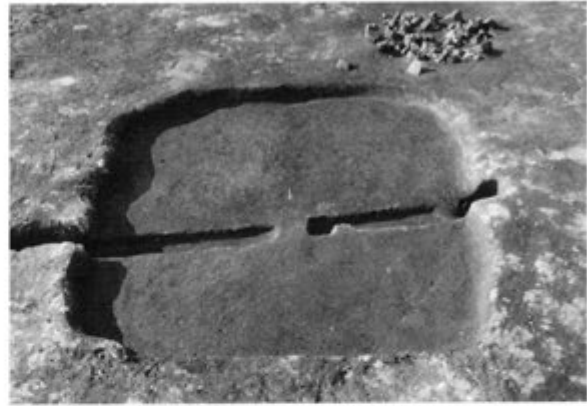


第7層の集石と第10層上面の遺構検出状況

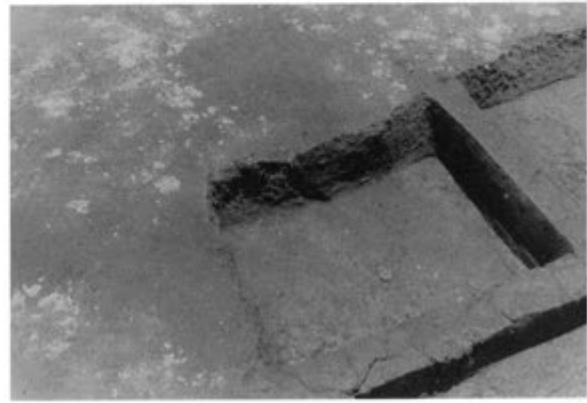
図版 4



周囲に柱穴が検出された竪穴住居跡(縄文時代早期前葉)



竪穴住居跡(縄文時代早期前葉)



↑竪穴住居跡の遺物出土状況
(縄文時代早期前葉)



←連穴土坑の連続(縄文時代早期前葉)

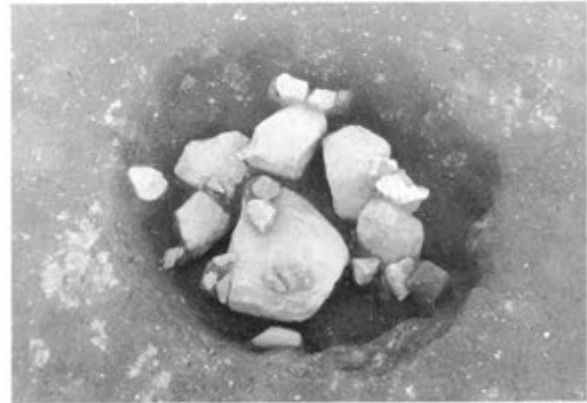
→連穴土坑にP-13が堆積した状況
(縄文時代早期前葉)



↑竪穴住居跡における連穴土坑
検出状況(縄文時代早期前葉)



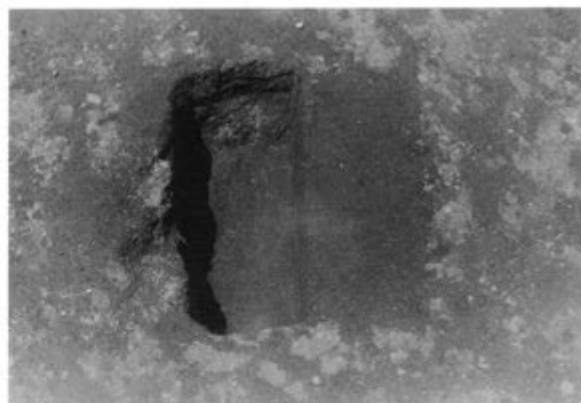
集石遺構(縄文時代早期前葉)



掘り込みを有する集石遺構(縄文時代早期前葉)



礫が入った土坑(縄文時代早期前葉)



方形土坑(縄文時代早期前葉)



第9層遺物出土状況



第9層土器出土状況



石皿出土状況



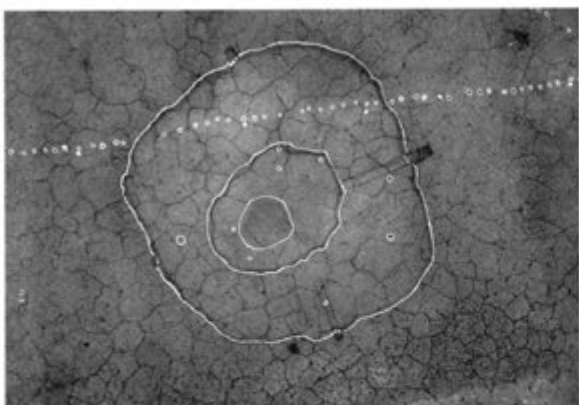
追加調査aトレンチ遺物出土状況



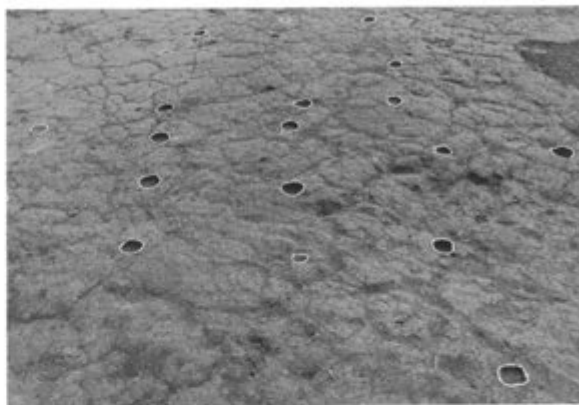
追加調査cトレンチ遺物出土状況



追加調査1トレンチ遺物出土状況



縄文時代晩期の竪穴住居跡



縄文時代晩期の掘立柱建物跡



縄文時代晩期の土坑断面



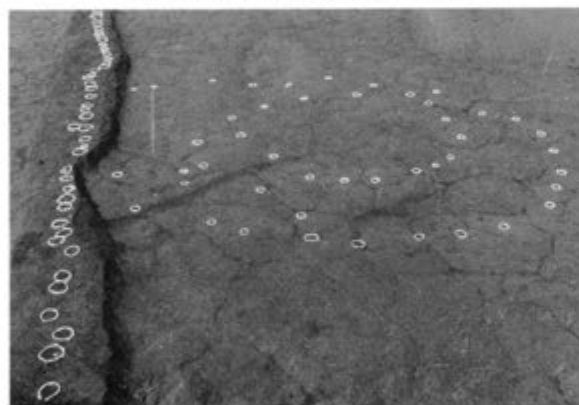
縄文時代晩期のドングリビット



弥生時代中期の竪穴住居跡



弥生時代中期の竪穴住居跡



弥生時代の柵跡と円形柵状遺構



弥生時代の周溝状遺構



1



4



2



5



3



6

縄文時代早期前葉の竪穴住居跡内の出土土器



7



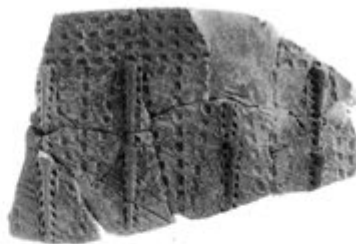
8



9



10



11



12



13



14

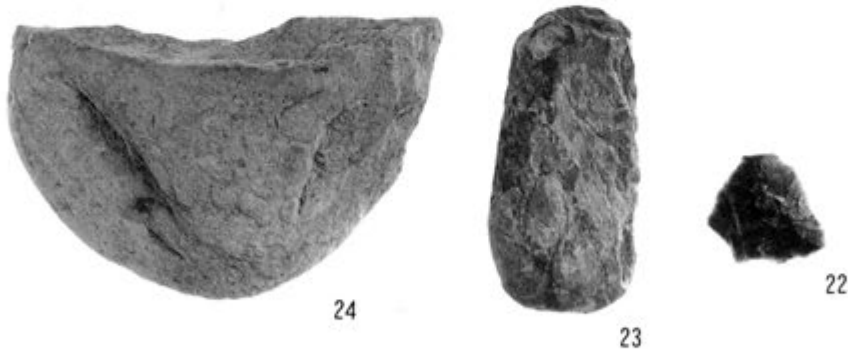
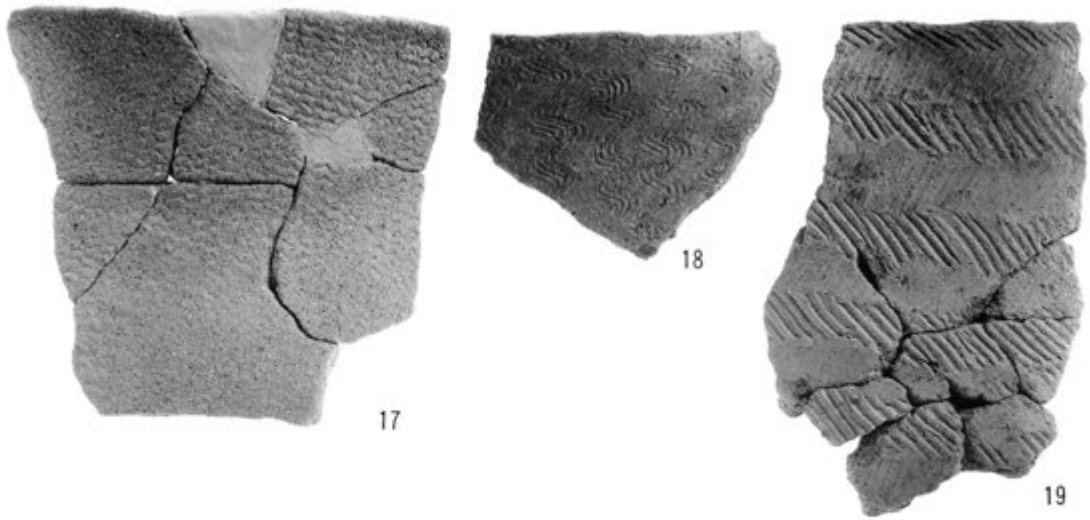


16



15

第9層(7~9)及び第7層(10~15)出土の前平式土器



第7層出土の土器(17~21)と縄文時代早期前葉の竪穴住居跡内出土の石器(22~24)



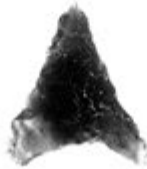
25



26



27



28



29



30



31

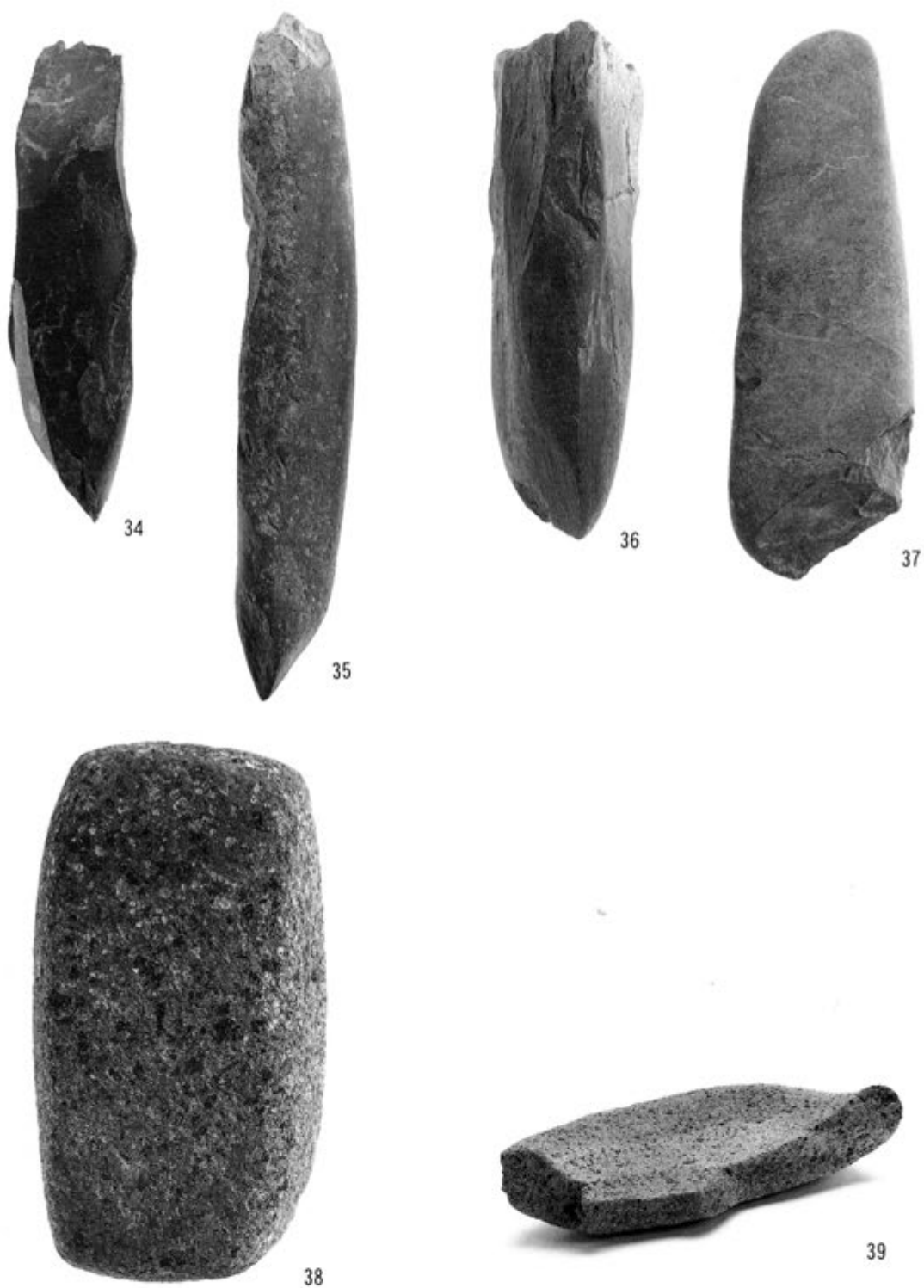


32



33

第7層出土の石器(1)



第7層出土の石器(2)



40



41



43



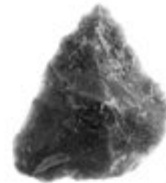
42



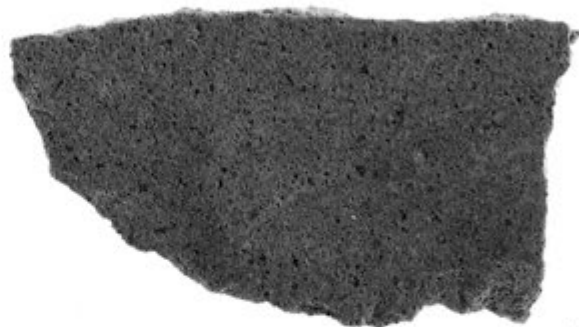
44



45



46



47

第7層出土の石器(3)

自然科学分析調査報告書

(抜 粹)

鹿児島県 上野原遺跡

株式会社 古環境研究所

上野原遺跡の土層とテフラ

測定結果

屈折率測定の結果を表1に示す。調査対象となっただけの試料においても、含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石、単斜輝石である。

E7区南壁の試料番号4に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.514-1.518と1.705-1.708である。また試料番号3に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.515-1.519および1.705-1.708である。さらに試料番号2に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.513-1.517と1.709-1.713である。

(仮)68番集石地点の試料番号3に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.515-1.518と1.705-1.708である。また試料番号2に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.515-1.519と1.705-1.709である。さらに試料番号1に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.508-1.514と1.705-1.708である。なおこの試料の火山ガラスについては、微細な班晶(microlite)が多く含まれており、さほど精度は高くない。

上場高原の露頭の試料番号7(P13最下部)に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.510-1.514と1.705-1.708である。また試料番号6(P13下部)に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.515-1.518と1.705-1.708である。試料番号4(P12)に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.510-1.514および1.708-1.711である。さらに試料番号2(P11下部)に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.513-1.517と1.709-1.713である。

方輝石の屈折率(γ)から、上場高原の露頭で認められるP13に同定される可能性が非常に高い。この軽石層が一次堆積層であれば、この住居跡はP13より下位にあることになる。なおその下位に認められた「ゴマシオ」状のテフラ粒子についても、P13に含まれるテフラ粒子と特徴を同じくしており、P13に由来するものと思われる。

(仮)68号集石遺構の下位の土層中に含まれる軽石粒子についても、とくに斜方輝石の屈折率(γ)から、P13に由来すると考えられる。したがって(仮)68号集石遺構は、P13より上位にあると考えられる。

小 結

上野原遺跡と桜島火山起源の縄文時代早期のテフラの標式地である上場高原の露頭において、テフラ層序を記載するとともに、とくに縄文時代早期のテフラについて屈折率測定を行ってテフラの同定を試みた。その結果、下位より少なくとも桜島薩摩テフラ(Sz-S, 約1.1~1.2万年前)、桜島13テフラ(P13, 9,500年前)、桜島12テフラ(P12, 約8,000年前)、米丸テフラ(Ynm, 約7,700年前)、桜島11テフラ(P11, 約7,500年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)を検出することができた。そして上野原遺跡では、下位よりSz-SとK-Ahの間にP13とP11が認められた。(仮)68号集石についてはP13より上位にあり、その下位の住居跡についてはP13より下位にある可能性が大きいものと思われる。

なお今回の調査では、縄文時代早期のテフラ以外にも、Sz-Sの下位やK-Ahの上にテフラを認めることができた。従来kの地域に分布する後期更新世以降のテフラについては、屈折率測定など系統的に岩石記載的な特徴把握などの分析が行われた例がほとんどない。また成層したテフラについては、ユニットごとに細かく記載分析を行う必要も考えられる。今後精度の高い屈折率測定などを積極的に行い、岩石記載特徴を把握して、火山灰編年学のための基礎的資料を蓄積していく必要がある。

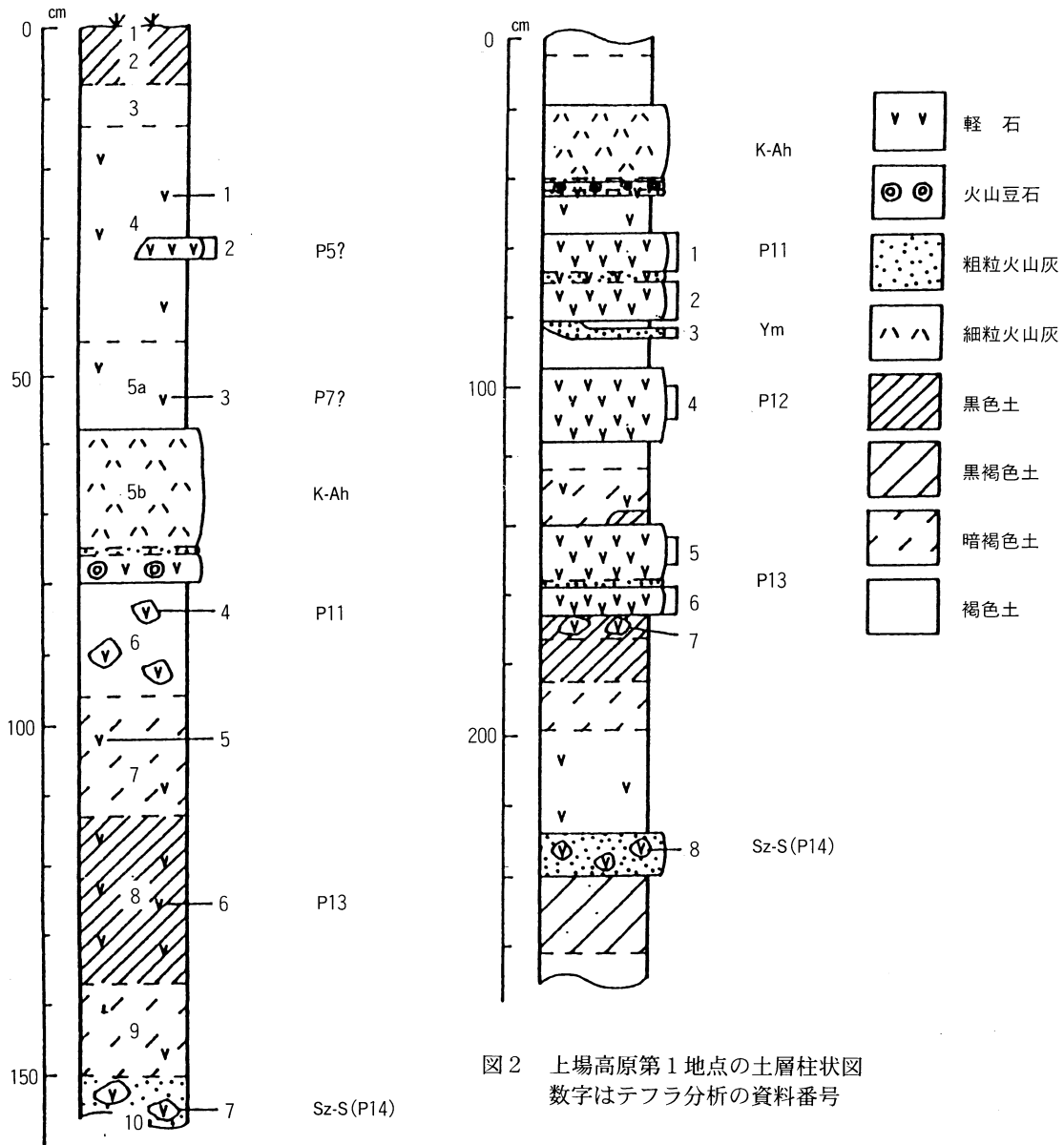


図1 上野原遺跡E7区南壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

図2 上場高原第1地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

上野原遺跡における植物珪酸体分析

まとめ

桜島13テフラ（P13, 約9,500年前）直下の9層の堆積当時は、クマザサ属などのササ類を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはブナ属やコナラ属などの落葉樹林が分布していたものと推定される。P13混の8層でもおおむね同様の状況であったと考えられるが、同層上部ではススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところが拡大し、遺跡周辺ではクスノキ科を主体とした照葉樹林が見られるようになったものと推定される。桜島11テフラ（P11, 約7,500年前）直下の7層から同テフラ混の6層にかけては、クスノキ科を主体とした照葉樹林が拡大し、クマザサ属などのササ類は大幅に減少したものと推定される。

その後、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約6,300年前）の堆積によって当時の植生は大きな影響を受けたと考えられるが、火砕流が及ばなかった本遺跡周辺では照葉樹林の回復が比較的早かったものと推定される。鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約6,300年前）直下の5a層から4層にかけては、クスノキ科などの照葉樹林に覆われたような状況であったと考えられ、イネ科植物はほとんど見られなかったものと推定される。3層もしくは2層の時期には、調査地点もしくはその近辺で稲作（陸稲）が開始されたものと推定される。

なお、P13（約9,500年前）直下の9層およびP11（約7,500年前）直下の7層では、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、モロコシ属型（モロコシが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）などの栽培種を含む分類群が検出され、これらの植物が何らかの形で調査区周辺に生育していたことが推定された。これらの可食植物の利用については、考古学的所見ともあわせて慎重に検討していく必要がある。

検出密度 (単位:×100個/g)

| 分類群 \ 試料 | 68号集石(仮) | | | | | 9層集石(仮) | | | | | E6区住居跡(仮) | | | |
|----------------|----------|------|------|------|------|---------|------|------|------|------|-----------|------|------|------|
| | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 4 | 5 |
| イネ科 | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒエ属型 | | | | | | | | 7 | 7 | | 7 | | | |
| エノコログサ属型 | 7 | 7 | 15 | 7 | | 21 | 15 | 7 | 7 | | | | | |
| キビ族型 | 22 | 21 | 15 | 14 | 7 | 21 | 22 | 15 | 7 | 42 | 22 | 7 | 7 | 22 |
| オヒシバ属型 | | | | | | | | | | | 7 | | | |
| モロコシ属型 | 7 | 7 | 15 | | | 7 | | | 7 | | | 7 | 7 | 7 |
| ジュズダマ属型 | 7 | 7 | 7 | | | | | | | | | 7 | 7 | 7 |
| ヨシ属 | | | | | | | | | | 7 | | | | 7 |
| ススキ属型 | 15 | 7 | | 22 | 29 | 21 | | 22 | 7 | 21 | 30 | 15 | 20 | 7 |
| ウシクサ族 | 104 | 49 | 125 | 58 | 137 | 57 | 52 | 51 | 50 | 49 | 104 | 22 | 33 | 73 |
| ウシクサ族(大型) | 7 | | 7 | | | | 7 | | | 14 | 7 | | | 7 |
| シバ族 | | | | | | | | | | | | | | |
| Aタイプ(くさび型) | 7 | | | | 7 | | 7 | | | | | | | |
| タケ亜科 | | | | | | | | | | | | | | |
| メダケ節型 | | | | | | | | | | | | | | |
| ネザサ節型 | | | 7 | | | | | | | | | | 7 | 7 |
| クマザサ属型 | 201 | 147 | 213 | 203 | 223 | 200 | 252 | 169 | 179 | 196 | 438 | 557 | 140 | 396 |
| ミヤコザサ節型 | 82 | 161 | 81 | 36 | 29 | 14 | 104 | 118 | 29 | 63 | 52 | 45 | 87 | 44 |
| 未分類等 | 254 | 161 | 397 | 384 | 432 | 222 | 356 | 301 | 329 | 364 | 504 | 550 | 160 | 433 |
| その他のイネ科 | | | | | | | | | | | | | | |
| 表皮毛起源 | 22 | 14 | 7 | 7 | | 21 | 15 | | | 7 | 30 | | 13 | 7 |
| 棒状珪酸体 | 500 | 392 | 589 | 580 | 691 | 415 | 570 | 558 | 509 | 566 | 779 | 780 | 400 | 675 |
| 茎部起源 | | | | | | | | | | | | | | |
| 未分類等 | 537 | 511 | 530 | 536 | 540 | 537 | 622 | 544 | 559 | 545 | 549 | 661 | 513 | 668 |
| 樹木起源 | | | | | | | | | | | | | | |
| ブナ科(シイ属) | | | 7 | | 7 | | | | | | | | | |
| ブナ科(アカガシ亜属?) | | | | | | | | | | | | | | |
| クスノキ科 | 30 | 14 | 29 | 14 | 29 | 7 | 7 | 22 | 14 | 7 | | | | |
| はめ絵パズル状(ブナ属など) | | | | | | | | | | | | | | |
| 多角形板状(コナラ属など) | 7 | | | | | | | | | | | | | |
| その他 | 15 | | 15 | 7 | | 7 | 15 | | 14 | 7 | | 7 | | 7 |
| (海綿骨針) | | | | | | | | | | | | | | |
| 植物珪酸体総数 | 1826 | 1497 | 2061 | 1870 | 2132 | 1552 | 2045 | 1814 | 1719 | 1888 | 2529 | 2659 | 1393 | 2370 |

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²・cm)

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| イネ | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒエ属型 | | | | | | | | 0.62 | 0.80 | | 0.62 | | | |
| ヨシ属 | | | | | | | | | | 0.44 | | | | 0.46 |
| ススキ属型 | 0.18 | 0.09 | | 0.27 | 0.36 | 0.27 | | 0.27 | 0.09 | 0.26 | 0.37 | 0.18 | 0.25 | 0.09 |
| メダケ節型 | | | | | | | | | | | | | | |
| ネザサ節型 | | | 0.04 | | | | | | | | | | 0.03 | 0.04 |
| クマザサ属型 | 1.51 | 1.10 | 1.80 | 1.52 | 1.67 | 1.50 | 1.89 | 1.89 | 1.27 | 1.47 | 3.28 | 4.18 | 1.05 | 2.97 |
| ミヤコザサ節型 | 0.25 | 0.48 | 0.24 | 0.11 | 0.09 | 0.04 | 0.31 | 0.31 | 0.35 | 0.19 | 0.16 | 0.13 | 0.26 | 0.13 |

ササ類の比率(%)

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| メダケ節型 | | | | | | | | | | | | | | |
| ネザサ節型 | | | 2 | | | | | | | | | | 2 | 1 |
| クマザサ属型 | 86 | 70 | 85 | 93 | 95 | 97 | 86 | 78 | 94 | 89 | 95 | 97 | 78 | 95 |
| ミヤコザサ節型 | 14 | 30 | 13 | 7 | 5 | 3 | 14 | 22 | 6 | 11 | 5 | 3 | 19 | 4 |

鹿児島県上野原遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

| 分類部 \ 試料 | E7区南壁 (基本土層) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|--------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| イネ科 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ | 52 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒエ属型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| エノコロコグサ属型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| キビ族型 | 7 | 7 | | | | | | 7 | 21 | 14 | 14 | 14 | 14 | 28 | 7 | 23 | 23 | 15 | 7 | 15 | 22 | |
| オヒシハ属型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| モロコシ属型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ジュズダマ属型 | | | | | | | | | | | 7 | | | | | | | | | | | |
| ヨシ属 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ススキ属型 | 104 | 99 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ウシクサ族 | 97 | 60 | 23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ウシクサ族 (大型) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| シハ族 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Aタイプ (くさび型) | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| タケ亜科 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| メダケ節型 | 142 | 83 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ネササ節型 | 74 | 40 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クマササ節型 | 15 | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ミヤコササ節型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 未分類等 | 45 | 20 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| その他のイネ科 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 表皮毛起源 | 7 | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 棒状珪酸体 | 305 | 291 | 98 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 基部起源 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 未分類等 | 484 | 530 | 406 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 樹木起源 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ブナ科 (シイ属) | 7 | 20 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ブナ科 (アガシ属) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クスノキ科 | 52 | 106 | 323 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| はめ絵バスル状 (ブナ属など) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 多角形板状 (コナラ属など) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| その他 | 7 | 20 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (海綿骨針) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 植物珪酸体総数 | 1400 | 1278 | 917 | 764 | 852 | 763 | 411 | 182 | 576 | 657 | 995 | 957 | 1181 | 1215 | 1082 | 1983 | 1844 | 1734 | 1988 | 1931 | 2039 | 2091 |

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|--|
| イネ | 1.53 | 0.19 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヒエ属型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ヨシ属 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ススキ属型 | 1.29 | 1.23 | 0.09 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| メダケ節型 | 1.64 | 0.38 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ネササ節型 | 0.36 | 0.19 | 0.07 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クマササ節型 | 0.11 | 0.10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ミヤコササ節型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 推定生産量 | | | | 0.44 | 0.44 | | 0.16 | 0.38 | 0.63 | 0.09 | 0.09 | 0.45 | 0.08 | 0.26 | 0.82 | 0.56 | 0.28 | 0.47 | 0.47 | | 0.61 | |
| 比率 (%) | | | | 0.10 | 0.11 | 0.05 | 0.17 | 0.55 | 0.21 | 1.01 | 0.54 | 1.54 | 0.88 | 0.94 | 1.92 | 1.75 | 2.18 | 2.64 | 1.74 | 1.80 | 1.88 | |
| | | | | 0.02 | 0.02 | | 0.04 | 0.06 | 0.04 | 0.08 | 0.12 | 0.11 | 0.09 | 0.18 | 0.13 | 0.14 | 0.11 | 0.14 | 0.11 | 0.15 | 0.15 | |

ササ類の比率 (%)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|----|----|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| メダケ節型 | 78 | 57 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ネササ節型 | 17 | 28 | 100 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クマササ節型 | 5 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ミヤコササ節型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 比率 (%) | | | | 100 | 83 | 100 | 100 | 100 | 93 | 77 | 100 | 93 | 95 | 88 | 89 | 96 | 91 | 94 | 94 | 91 | 94 | 91 |
| | | | | 17 | 17 | | | | 7 | 23 | 100 | 7 | 5 | 12 | 11 | 4 | 9 | 6 | 5 | 6 | 8 | 29 |

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(23)

上野原遺跡

発行日 1997年11月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252
TEL 0995-65-8787 FAX 0995-65-8117

印刷所 株式会社 トライ社
〒892 鹿児島市南林寺町12-6
TEL 099-226-0815